

法助動詞の歴史的研究 一序説一

小 野 茂

1. ま え が き

私はこれまでに、英語の助動詞と呼ばれるもののうち四つの語、すなわち、*must* (OE **mōtan*, *mōste*), *can* (OE *cunnan*), *may* (OE *magan*) および *ought* (OE *āgan*, *āhte*) の歴史的発達を明らかにしようとつとめた⁽¹⁾。

しかし、これらの語の意味・用法の変遷には、相互間の関連があると考えられ、どの一語をとってみても、その一語だけを取り扱ったのでは十分でない。これらの語および *shall* (OE *sculan*), *will* (OE *willan*) などの間にはある種の共通性がある、その共通性の故に、これらが一つのグループとして考えられるのである。私は標題に「法助動詞」(Modal auxiliary) という名称を使ったが、それは、これらの語を一つのグループとした場合に、しばしばこの名称が用いられるという慣用に従ったまでである。とにかくこういった名称が長く行なわれているということは、これらの語に従来一つの共通性が認められていたことの指標となる。そこでこの問題を取り扱う際に、いま問題にしようとしている幾つかの語がどのように考えられてきたか、また、「法助動詞」という名称がいかにして生まれ、諸学者によっていかに用いられてきたかを、簡単に眺めてみることは無駄ではないと思う。これが本稿の第 1 の課題であって、これについて第 2 章でのべたいと思う。

(1) 「*Motan* の意味とその変遷」『学習院大学文学部研究年報』第三輯、1955。pp. 117—192。
 ‘Some Notes on the Auxiliary **motan*’. *Anglica*, Vol. 3, No. 3, 1958, pp. 64—80。
 「*Cunnan* (*Can*) と *Magan* (*May*)」『学習院大学文学部研究年報』第五輯、1957—1958。pp. 289—323。
 ‘The Early Development of the Auxiliary *Ought*’. *Htotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 1, No. 1, 1960. pp. 41—61。

ところで、私が本稿を書くにいたった直接の動機は、これまで比較的個別的に取り扱ってきた一群の助動詞の歴史的発達を、相互の関連を考えて、いわば体系的に叙述するにはどのようにすべきかを考察することであった。このことが本稿の第2の課題であって、それが第3章の主題となる。

従来歴史的の研究は、個々の現象の発達を個別的にたどることが多く、各時期の言語体系ともいうべきものの中における個々の現象の位置を明らかにした上で、その変遷をたどることがおろそかにされがちであった⁽²⁾。そこで個々の法助動詞の意味・用法の発達をたどることは主として辞書の領域に属するものとされた。OEDにおける各語の歴史的記述はその代表的なものである。他方、それらが体系的に取り扱われる場合には、「法助動詞」という名称が示すように、「法」(Mood) という文法範疇の枠内で考えられることがふつうであった。したがって、その場合には、そういった助動詞の意味・用法の一部のみが考慮されるという結果になる。そこで、各語の意味・用法の全体を考えながら、相互間の関連を考慮に入れて、いわば体系的に取り扱うことが必要であると思う。

以上のべたように、本稿は、私のこれまでの研究に対する反省を行なうことをその動機としているのであるが、どこまでも具体的な事実を明らかにすることが目標である。その意味で、第3章ではマタイ伝の諸版の実例を中心としてのべたいと思う。なお便宜上「法助動詞の歴史的的研究」と題したが、この問題の詳細な記述を意図したわけではない。「序説」としたのはこのためである。

2. 法助動詞についての諸説

2.1. 法助動詞 (Modal auxiliary) という用語は Poutsma, Curme などが用いているが、彼等がはじめて用いたわけでもなく、また彼等

(2) Cf. "The philologist had been too much inclined to itemize his material, or indeed according to his structuralist critics to atomize it; he has learnt to allow for systematic features and structural forces in language". Reid, *Historical Philology and Linguistic Science*, p. 24.

以外の学者によってもかなり広く使用されている。

たとえば 18 世紀のイギリスの文法家の一人である Loughton の “*May and can (modal auxiliaries) have relation to time present and to come, might and cou'd to time past and to come.*”(3) という言葉のなかにもこの名称が用いられている。ここで Loughton は、英語には Mood があるかということを問題にして、これに対して ‘no’ と答えているのであるが、Mood を表わす助動詞という意味で Modal auxiliary という語を用いているようである。

同時代の文法家 Greenwood は “Now in English, there are no moods……, but (it) does all that by the aid of auxiliary or helping verbs, which in Latin and some other languages, is done by the diversity of terminations or endings.”(4) とのべている。17—18 世紀のイギリスの文法家の Mood の取り扱い方について、Charleston はつぎのように要約している。 “When dealing with the problem of the moods in English grammar, the grammarians were confused by the example of Latin grammar with its modal endings. Thus some (such as Cooper, Maittaire, Ward) adopt the Latin moods and give their English equivalents (usually by means of auxiliary verbs); others (such as Greenwood and Loughton) consider that English grammar has no moods (or at the outside one, the indicative, since there are no modal endings), but they also give the English equivalents of the Latin moods; others again (especially White) take as a starting-point the theoretical functions of mood and explain how these may be expressed in English. On the whole, the treatment of moods by these grammarians of the 17th and 18th century shows a confusion and hesitancy which is still to be observed to-day among modern

(3) Loughton, *Practical Grammar of the English Tongue*, 1734. Charleston, *Studies on the Syntax of the English Verb*, p. 196 による。

(4) 1711—1712 出版の英文法。Charleston, *op. cit.*, p. 195 による。

grammarians.”⁽⁵⁾つまり Modal auxiliary という名称は、ラテン語などの語形変化の豊富な言語において Mood を表わす語形変化に相当するものとして考えられていたのである。

すなわち Modal auxiliary の Modal とは文法範疇としての Mood のことを意味しているのである。そこで英語における Mood をいかに考えるかによって、Modal auxiliary に対する考え方が決定されるわけである。

2. 2. Mätzner は “Unter Modalverben kann man, wenn auf die Bedeutung des grammatischen Modus zurückgegangen wird, füglich nur solche Verba verstehen, welche in gewisser Weise das, was formreichere Sprachen durch einen Modus auszudrücken pflegen, in ihrer Zusammenstellung mit einer Verbalform (dem Infinitiv) ersetzen.”⁽⁶⁾とのべているが、彼が主として考えているのは、語形変化の豊富な言語、古い時代の言語、における Konjunktiv の語形にかわるもの (Ersatz) としての一群の動詞と不定詞の結合である⁽⁷⁾。

2. 3. Sweet は Modal auxiliary という名称は用いていないが、彼の Mood に対する考え方を要約すればつぎのようである。Sweet は Mood を “grammatical forms expressing different relations between subject and predicate”⁽⁸⁾であるとし、英語に Indicative mood (Fact-mood) と Subjunctive mood (Thought-mood) を認める。彼は Inflection によって表わされる Mood を Inflectional mood と呼ぶ。ところで英語において、Inflection によって Subjunctive が Indicative と区別されるのは、3 人称単数現在 (*he see*) と、*be* 動詞 (*I be, he be, he were*) のみであり、他はおもに助動詞によって表わされる。これを Sweet は Periphrastic mood または Auxiliary mood という。また *if I knew his address, I would write to him* における

(5) Charleston, *op. cit.*, p. 202.

(6) Mätzner, *Englische Grammatik*, II. 1. p. 141.

(7) Mätzner の Modalverbum に相当するものを、Brunner は Modalhilfszeitwort と呼ぶ。(Die englische Sprache, II. p. 289.)

(8) Sweet, *A New English Grammar*, § 293.

knew のように Thought-statement が Tense によって表わされる場合、これを Tense-mood と呼び、Inflectional mood, Auxiliary mood, Tense-mood をすべて Thought-form とする⁽⁹⁾。このように、Sweet は Modal auxiliary という名称は用いていないが、それに相当する助動詞の用法を認めているのである。

2. 4. Poutsma は “Verbs which are used as substitutes for the inflections of tense, mood, voice, or aspect are styled auxiliaries.”⁽¹⁰⁾ のように助動詞を定義する。ところで英語の場合、Mood の助動詞は、実際に（現代の）英語に存在する（Subjunctive の）Modal inflection のかわりに用いられるのに対して、他の助動詞は、他の言語において Inflection が果している役割を演じているのであるから、Mood の助動詞のみが、語の厳密な意味で助動詞ということができると共に、Subjunctive mood の助動詞は ‘distinctly emotional’ な点で、他の助動詞と区別されると Poutsma は考える⁽¹¹⁾。彼は Modal inflection にかわる場合のみを Modal auxiliary とよび、Inflection による Subjunctive を Inflectional subjunctive, Modal auxiliary による Subjunctive を Periphrastic subjunctive と呼ぶ⁽¹²⁾。Poutsma は別の所で、“The verbs which are used to indicate the speaker’s attitude towards the fulfilment of an action or state, i. e. whether he considers them as matter of certainty or uncertainty, are *to be, can, may, might, must, shall, should, will, and would*. Some of these verbs, viz. *may, might, shall, should and would*, are also used as modal auxiliaries, i. e. as substitutes for actually existing mood-forms. . . . In the present chapter we are only concerned with those applications of the above verbs which have no rival mood-forms, and which are, therefore, better described as modal verbs.”⁽¹³⁾ とのべて、Modal auxiliary と Modal verb

(9) Sweet, *op. cit.*, §§ 298—302.

(10) Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*, Ch. XLV. 12.

(11) *Ibid.*

(12) Poutsma, *op. cit.*, Ch. XLV. 8. a.

を区別している。ところが “It may be convenient to consider modal auxiliaries as a variety of modal verbs, the latter term being also applicable to verbs which, although not corresponding to modal inflections, also serve the purpose of denoting the speaker's attitude as to the fulfilment of a prospective action or state.”⁽¹⁴⁾とのべており、彼は Modal verb という名称を、Modal auxiliary と対比させて用いると共に、それをも含めて総称的にも用いていることが察せられる。Poutsma は Auxiliary という語を Mätzner や Mason とほとんど同じ意味に用いているといているのであるから⁽¹⁵⁾、彼の Modal auxiliary は Mätzner の Modalverbum (Brunner の Modalhilfszeitwort) と同じものと考えてさしつかえない。ただ Mätzner などは、他の言語や、古い時代の言語との比較において考えているのに対して、Poutsma は現代の英語に実際に行なわれている Modal inflection との対比において考えている点に相違がある。

2. 5. Kruisinga は “When the modification of the verbal meaning is expressed by purely grammatical means we call it modality.” とのべ、Modality を表わす手段として (1) Auxiliaries; (2) Verbal forms; (3) Word-order; (4) Intonation をあげて、この場合の Auxiliaries を Modal auxiliaries といているが⁽¹⁶⁾、彼はこの言葉で Modal preterite としての Auxiliaries を考えているようである⁽¹⁷⁾。Kruisinga の考え方を受けついでると見られる Zandvoort の “When the preterite of an auxiliary is used with modal function, it is called an AUXILIARY OF MODALITY ”⁽¹⁸⁾ という言葉はこのことを明示していると考えられる。ただし Zandvoort は “An auxiliary of modality is not necessarily a preterite ”⁽¹⁹⁾

(13) Poutsma, *op. cit.*, Ch. I. 16.

(14) Poutsma, *op. cit.*, Ch. XLV. 12.

(15) *Ibid.*

(16) Kruisinga, *A Handbook of Present-day English*, § 2478.

(17) Cf. Kruisinga, *op. cit.*, § 40.

(18) Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*, § 223.

(19) *Ibid.*

といて、*May you live to repent it!* | *I hope he may succeed.* | *Leave the book here, (so) that I may read it.* | *Whatever faults he may have had, dullness was not one of them.*⁽²⁰⁾ などにおける *may*, *It has been decided that the second reading shall not be opposed.* | *Do whatever shall seem good to you.* | *May God be with us when that day shall come.*⁽²¹⁾ などにおける *shall* をあげている。なお Zandvoort によれば Mood とは (*he*) *play*—(*he*) *plays* の対立によって示される Verbal category で、前者 (Subjunctive) は non-fact を、後者 (Indicative) は fact あるいは non-fact を示す。Modal は Preterite of modality のように、non-fact あるいは少なくとも modification of fact を表わす文法手段を指すのに用いられる形容詞であり、Modality は Modal と同じ概念を表わす名詞である⁽²²⁾。

2. 6. Curme は記録に残った最古の時代以来、Simple subjunctive form はその本来の distinctiveness の多くを失なったが、本来の形を生み出した ‘forces’ はその働きを止めていないといて、*“As the simple subjunctive forms in the course of a long phonetic development lost their distinctive endings, modal auxiliaries were pressed into service to express the same ideas. In large measure they are subjunctive forms, although not recognizable by a distinctive ending. In fact, however, whether indicative or subjunctive in form, they perform the function of the older subjunctive and are here treated as our modern subjunctive forms.”*⁽²³⁾ とのべている。Modal auxiliary は古い時代の Simple subjunctive にかわるものであると考える点では他の学者と同様であるが、Modal auxiliary による表現をも Subjunctive form として扱うところに彼の特色がある。この点で、同じく他国語や古い時代の Subjunctive と比較しながら、Modal auxiliary による表現を Subjunctive-equivalent

(20) Zandvoort, *op. cit.*, § 158.

(21) Zandvoort, *op. cit.*, § 171.

(22) Zandvoort, *op. cit.*, p. 344. (Appendix).

(23) Curme, *Syntax*, p. 393.

と名づける Onions⁽²⁴⁾や Sonnenschein⁽²⁵⁾とも異なっている。

2. 7. Curme のように Modal auxiliary を用いた表現をも Subjunctive form と認める立場は, Mood を意味の側からみているのであって, これを押し進めれば, 心的態度の数だけ Mood があるということになるが, この立場に立つ Deutschbein は 16 だけあげている⁽²⁶⁾. Sonnenschein も Mood を意味の立場から考えている. 彼は Case, Tense, Mood などについてつぎのようにのべている. “It is impossible to frame a definition of such terms on the basis of distinction in *form*. They are essentially terms of syntax; that is to say, they denote categories of *meaning*, not categories of *form*. And this is just as true of Latin grammar as it is of English grammar.……And from this point of view the supposed inapplicability of such terms to languages which have lost many of their old inflexions disappears.”⁽²⁷⁾ Sonnenschein は Case の場合と同じく, Form だけでなく, Context, Order of words, Phrasing and intonation も Mood の区別を表わすと考えているが⁽²⁸⁾, Case の場合に「前置詞+対格」を Case-phrase と呼んで Case とは呼ばないのと同様に, Subjunctive も “such forms as correspond to the forms commonly called subjunctives in other languages” に限って, 助動詞によるものは Subjunctive equivalent と呼んでいる⁽²⁹⁾. すなわち Sonnenschein は意味に基づきながらも, Curme や Deutschbein とは違って形態への顧慮を払っているのである。

2. 8. これに対して Jespersen は “it is very important to remember that we speak of “mood” only if this attitude of mind is shown in the form of the verb: mood thus is a syntactic, not a notional category”⁽³⁰⁾といい, さらに Subjunctive について, “If

(24) Onions, *An Advanced English Syntax*, §§ 47, 152 など.

(25) Sonnenschein, *A New English Grammar*, §§ 436, 439 など.

(26) Deutschbein, *System der neuenglischen Syntax*, § 85.

(27) Sonnenschein, *A New English Grammar*, II. p. 3 f.

(28) Sonnenschein, *The Soul of Grammar*, § 77.

(29) Sonnenschein, *op. cit.*, § 125 (§ 85 を参照).

we pass on to the Indicative and the Subjunctive, the first remark that obtrudes itself is that the treatment of this subject has been needlessly complicated by those writers who speak of combinations with auxiliary verbs, e. g. *may he come* | *he may come* | *if he should come* | *he would come*, as if they were subjunctives of the verb *come*, or subjunctive equivalents. Scholars would hardly have used these expressions if they had had only the English language to deal with, for it is merely the fact that such combinations in some cases serve to translate simple subjunctives in German or Latin that suggests the use of such terms, exactly as people will call *to the boy* a dative case".⁽³¹⁾とのべて、Sonnenschein などの考えに反対している。Jespersen は動詞自体に形態的に表現されるもののみを Mood と認めるのである。したがって *may write*, *would (should) write* などは *write* の Mood ではなく、またいわゆる Modal preterite は Imaginative tense として Tense で扱われるのであって、Jespersen の文法では Mood の章は短い⁽³²⁾。

2. 9. 以上のように、Modal auxiliary という名称は、その名が示すように、語形変化の豊富な言語における Subjunctive form にかわるものとして考えられているのであり、それをあるいは Subjunctive-equivalent, あるいは Subjunctive form と認める学者があるのである。(ただ、Poutsma は現代英語に実際に存在する Modal inflection にかわるものと考えていて、記述的態度を重視している。さらに彼は Modal auxiliary と Modal verb とを区別することによって他の諸学者よりも周到に考えている。)すなわち、Auxiliary verb という名称自体が、おもにラテン語における Tense, Mood, Voice, などを表わすための、補助的手段という意味で考え出されたもので、したがって、そこに含まれた諸語の全用法をおおうものとしてはこの名

(30) Jespersen, *The Philosophy of Grammar*, p. 313.

(31) Jespersen, *op. cit.*, p. 315.

(32) Cf. Jespersen, *The System of Grammar*, p. 39.

称は不適当であるといわなければならない。たとえば “The simple infinitive, without *to*, remains: 1. after the auxiliaries of tense, mood, periphrasis, *shall, will; may, can; do*; and the quasi-auxiliaries, *must*, (and sometimes) *need, dare*”⁽³³⁾ という OED の説明に Quasi-auxiliaries という名称が用いられているのは、この名称で呼ばれるものが、Auxiliaries には含められないが、それでも Auxiliaries との共通性を持つことが認められているからであろう。これについて Jespersen は “—showing thereby that it is really impossible to find a comprehensive descriptive name for the verbs we are here concerned with”⁽³⁴⁾ とのべている。このような由来のある Auxiliary verb という名称を Jespersen が捨てたのは、上述のような彼の立場から当然であるが、いわゆる Auxiliary verbs を “small” verbs⁽³⁵⁾ あるいは “lesser” verbs⁽³⁶⁾ と呼んでいるのは、それらの間に Syntactic な面での共通性を認めているからである。ここでいわゆる Modal auxiliary についていうならば、ふつうに Modal inflection に対応するものとしての Modal auxiliary に対して、総括的な意味での Poutsma の Modal verb および, Inflection との対応という立場から考えられたのではない Jespersen の “small” (or “lesser”) verb (の一部) という考え方があるわけであって、これはいわゆる「助」動詞を従来の文法範疇の枠内から解放する方向へと向かっていると考えられる。

2. 10. すでに 2. 4 で示したように、Poutsma が Modal verb としてあげているのは *be, can, may, might, must, shall, should, will*, および *would*, であり、このなかで *may, might, shall, should* および *would* は Modal auxiliary としても用いられると彼はいつている⁽³⁷⁾。Modal verb としてはこれに *ought* が加えられ、また *let, do* など

(33) OED s. v. *to*, B.

(34) Jespersen, *A Modern English Grammar*, V. 12. 16.

(35) Jespersen, *Analytic Syntax*, 23. 4; *A Modern English Grammar*, V. 12. 1₁—12. 1₃.

(36) Jespersen, *A Modern English Grammar*, V. 23. 1₄.

(37) Poutsma, *op. cit.*, Ch. I. 16. 151 頁に引用。

共に考えることもできよう。ではこういった諸語の間にどのような共通性があるであろうか。

一般に助動詞の特徴とされているのは(1)直説法現在 3 人称単数で *-s* をつけないこと (*be, have, do* を除く); (2)不定詞, *ing* 形, 過去分詞形を欠くこと (*be, have, do* を除く); (3) *to* なしの不定詞と結合すること (*be, have, ought, used* を除く); (4)疑問文・否定文において *do* を用いないこと; (5)ふつう弱形が用いられること (*may, might, ought, need, dare, used* を除く) などであるが括弧内に記したように例外も少なくなく、これだけの特徴を持つものを助動詞と呼ぶというような厳密な定義を下すことはできない。すでにのべたように、助動詞というものが Tense, Mood, Voice, などの Inflection にかわるものとして考えられたのであって、特定の基準によって立てられた語類ではないのであるから、このことは当然である。ところで Poutsma が Modal verb と考えているものに限ってみると、*be* を除いて、すべて(1)から(4)までの特徴をそなえている。これに *ought* を加えれば、それは(3)の特徴を欠いている。ここで歴史的にみるならば、ふつう助動詞とされているもののなかで、*ought* (OE 過去単数 *āhte*; 直説法現在 1, 3 人称単数 *āh*, 不定詞 *āgan*), *can* (OE *cann, cunnan*), *dare* (OE *dearr, durrann*), *shall* (OE *sceal, sculan*), *must* (OE 過去単数 *mōste*; *mōt, *mōtan*), *may* (OE *mæg, magan*) は Preterite-present verb に属し、*be* (OE 1 *bēo, eom*, 3 *bip, is*; *bēon, wesan*), *will* (OE 1 *wille*, 3 *wile*; *willan*), *do* (OE 1 *dō*, 3 *dēp*; *dōn*) は *-mi* 動詞に属して、Modal verb はすべてこのなかに含まれている。しかし Preterite-present verb のなかには、上にあげたもののほかに *wāt* ‘know’, *dēag* ‘avail’, *ann* ‘grant’, *pearf* ‘need’, *geman* ‘remember’, *be-*, *geneah* ‘be enough’ が含まれ、*-mi* 動詞には *gā* ‘go’ があるのであって、歴史的にみても助動詞は一つの語類をなすものではない⁽³⁸⁾。(ただし、Preterite-present verb のなか

(38) Sievers & Brunner, *Altenglische Grammatik* pp. 384—397.

で今日に残っているのはいわゆる助動詞のみである。) 以上のように、現代英語における幾つかの特徴をみても、また参考のために歴史的な考慮を加えても、助動詞にはある程度の共通性を認めることはできるにしても、特定の基準のもとに一つの語類として設定され得るほどのものではない。

2. 11. 上述のことから、少なくとも Morphological には、等質的な語類として助動詞を認めることは不可能であることが考えられる。これに対して Syntactical な面からみると、本動詞のある形態と結びついて、文構造のなかで、単一の動詞と同じ Syntactical な単位、つまり動詞句 (Verb phrase) を構成する一群の語を認めることはできる。Fries は Class 2 に属する諸語と共に現われ、しかもそれらのみと共に現われる諸語として Group B なる Function words の一群を設定した⁽³⁹⁾。Verb phrase に現われる本動詞の形態は (1) *to* なしの不定詞、(2) *to* 付きの不定詞、(3) *ing* 形、(4) 過去分詞の四つであるが、これによって Hill は Verb phrase をつぎのような基本型に分けている。⁽⁴⁰⁾

TYPE A ₁		
I	<i>can</i>	(F 1)
He	<i>can</i>	(F 2)
I	<i>could</i>	(F 3)
		} <i>go</i> (F 1-infinitive)
TYPE A ₂		
I	<i>want</i>	(F 1)
He	<i>wants</i>	(F 2)
I	<i>wanted</i>	(F 3)
		} <i>to go</i> (F 1-infinitive)
TYPE B		
I	<i>keep</i>	(F 1)
He	<i>keeps</i>	(F 2)
		} <i>trying</i> (F 4-present participle)

(39) Fries, *The Structure of English*, p. 91.

(40) Hill, *Introduction to Linguistic Structures*, p. 191. 表中の F は Verb form を指す。drink を例にとれば F 1 *drink*, F 2 *drinks*, F 3 *drank*, F 4 *drinking*, F 5 *drunk*: *can* ならば F 1 *can*, F 2 *can*, F 3 *could* で F 4, F 5 はない。

I *kept* (F 2)}

TYPE C

I *have* (F 1)}

He *has* (F 2) } *taken* (F 5 past participle)

I *had* (F 3)}

Type A₁ の Verb phrase を構成する重要な語は *can, do, may, will, shall, must* であり、いずれも *-n't* なる否定形を持つ。しかしほかの Type を構成する *ought, is, have* などもこの否定形を持ち、また Type A₁ を構成しても *let, make* などはこの否定形を持たない⁽⁴¹⁾。他方これらの語が並置される場合には一定の位置の関係があって、

(a) (b) (c)

The students *may have had to be good*

might

would

must

(a) (b) (c) (d)

The students *may have had to be moving*

might

get

would

keep

must, etc.

be moved

get moved⁽⁴²⁾

にみられるように、F₄, F₅ の Inflectional form を持たないもの、すなわち *can, may, must, ought, shall, will*, は必ず(a)の位置を占める⁽⁴³⁾。

このように Syntactical な面からみると、Verb phrase の構成要素

(41) Hill, *op. cit.*, p. 192.

(42) Fries, *op. cit.*, p. 91.

(43) Hill の分類によれば、Inflection の点で *can, may, shall, will* は Class VII 2 に、*ought, must* は Class VII 3 に属し、Syntactical には *can, may, shall, will, must* は Type A₁, *ought* は Type A₂ の Verb phrase の構成要素である。

として本動詞の不定詞 (*to* なし, あるいは, *to* つき), *ing* 形, 過去分詞形のいずれかを伴う一群の Function words 取り出すことができる。それらの語のなかには, ふつう助動詞と呼ばれるものはすべて含まれるが, それだけではない。語類設定の基準が異なるのであるからそれは当然のことである。また F_4, F_5 を欠いた *can, may, must, ought, shall, will* は, 当然のこととして, Verb phrase を構成する Function words が二つ以上並置されるときに位置上の特色を持っていて, Morphological および Syntactical な共通性を持つということが出来る。

(ただし *ought* のみは *to*+ F_1 と結合する点でほかのものとは異なる。) これらの語はふつう Modal auxiliary とされているものとほぼ一致するのであるが, それらが, いまのべたように, かなりの共通性を持っていることは認められても, Modal auxiliary という概念が, 多分に意味の側から考えられていることに注目しなければならない。そこでこれらの語に共通であって, 他の語と区別するような意味が認められるかということを考えてみると, そのようなものはないであろう。たとえば *He can do it* は *He is able to do it* といいかえられ, *You may go* は *You are allowed to go* といえ, *He will go to Chicago tomorrow* は未来を表わすといっても, 未来の概念は *He goes to Chicago tomorrow/He can go to Chicago tomorrow/He wants to go to Chicago tomorrow* などによっても表わされる。Hill は Type A_1 および Type A_2 の Verb phrase の Structural semantic component を futurity としているが⁽⁴⁴⁾, さきにものべたように, これらの Type を構成する語は *can, may, must, ought, shall, will* のみではない。こういった意味でも「いわゆる “modal” auxiliary の “modal” に特別な意味を認めるならば, それは助動詞という特別な語類があるからそれと平行して特別な意味があるとする誤解にすぎない」⁽⁴⁵⁾という中島教授の言葉を認めねばならない。

2. 12. 以上, 私はいわゆる法助動詞というものを取り扱うにあた

(44) Hill, *op. cit.*, p. 215.

(45) 中島文雄「文法の原理」p. 221.

って、それがこれまでいかに考えられてきたかを、多少なりともたどって見た。助動詞というものは元来 Tense, Mood, Aspect, Voice などの Inflection にかわるものとして考えられたのであり、一定の基準によって設定された語類ではないから、その性格には多分にあいまいな所がある。また、こういった文法範疇を表わす手段というならば、必ずしもふつうに助動詞と考えられている語に限られることはないのである。つぎに Morphological な面から考えても、いわゆる助動詞を一つの語類とするような一定の形態上の特色は認められない。Syntactical な面から Verb phrase の構成要素と いうものを取り出して、その基準によって一つの語類を考えることは可能である。動詞全体のなかに、一定の基準によって助動詞なる語類を設定し得るのは Syntactical な面から考えた場合のみであろう⁽⁴⁶⁾。もしこうして考えられた語類のなかに Modal auxiliary なるものを認めようとするれば、その場合の Modal という概念は純粋に意味論的なものであってはならず、また Inflection からの類推によるべきでもないはずである。もしそうすれば、そこに含まれる語を Syntactical に設定された語類に限るいわれはないからである。いま Verb phrase の四つの type (A₁, A₂, B, C) をみれば、それぞれにある共通な Structural meaning (Hill では Structural semantic component) が考えられる⁽⁴⁷⁾。しかし *be + ing* 形, *be + 過去分詞形*, *have + 過去分詞形* の場合のように、Function word が Empty word と化しているならば問題は少ないが、本来の Lexical meaning を持っている場合には、Structural な分析の領域を越えることになる。いわゆる Modal auxiliary の場合、むしろそこに問題点があり、Lexical meaning を取り扱いながらも、Mo-

(46) Cf. "The definition of a verbal auxiliary must be based largely on syntax rather than on the somewhat debatable inflection, and is therefore a syntactic rather than a paradigmatic class". (Gleason, *An Introduction to Descriptive Linguistics*, p. 104.)

(47) Cf. Hill *op. cit.*, pp. 205 ff. Hill は A₁, A₂ の Structural semantic component を futurity, B のそれを non-habitual action and incomplete action, C のそれを non-past action and completeness とする。

dal auxiliary 相互の関連を考察し、体系的な考察が必要とされるのである。“Wichtiger als die Einordnung der Hv. in die Gesamtheit der Verben ist jedoch die Beziehung der Hv. d. h. ihrer Bedeutungen, zueinander. Stellen die Hv. etwa ein sprachliches Feld?”⁽⁴⁸⁾ という Standop の言葉にはこの問題が含蓄されていると思う。Standop は OE の *magan, mōtan, seulan, willan* の四つの語を取り上げているが、考察の範囲をどれだけの語に限るかを決定する絶対的な基準はないと思われる。また、すでにのべたように、いわゆる Modal auxiliary のみに共通な特殊な意味というものは認められないのだから、主として意味の側から考察しようとするれば、Modal auxiliary にみられる意味を表わすと思われる語をすべて取り上げねばならないであろう。しかし Modal auxiliary というものが文法の問題となる以上は単に個別的ではなく、Syntactical な立場から Verb phrase の構成要素としてみるべきであろう。そこで Syntactical および Morphological な特徴を考慮に入れて、現代英語において Type A の Verb phrase を構成するもののなかから、*can, may, must, ought, shall, will* を取り上げて次章における歴史的考察の対象としたいと思う。

3. 歴史的の研究の試み

3. 1. 法助動詞の歴史的の研究を問題にするに際して、その準備段階として、前章において、これまでに法助動詞というものがいかに考えられていたか、また一定の基準によって法助動詞という語類を設定し得るかを考察したのであるが、本章では、やや便宜的ではあるけれども、前章の最後で限定した語を中心として歴史的な考察を試みたいと思う。

「歴史的の研究」という言葉で私が考えているのは、言語の個々の要素の変遷をたどることではない。言語のいかなる要素も、ある特定の時期において一定の位置を占めており、他の要素との関係において存

(48) Standop, *Syntax und Semantik der modalen Hilfsverben im Altenglischen*, p. 15.
(Hv. は Hilfsverben の略)

在している。このような関係を考えずに、個々の要素の変遷をたどることは真の意味で歴史的研究とはいえない。歴史的研究は少なくとも二つの共時的な記述を前提とすると考えられる⁽⁴⁹⁾。

3. 2. ここで二、三の具体的な問題について、ごく概括的に考えてみよう。たとえば OE *cunnan* は多くの場合本動詞として目的語を伴わない、大体 ‘to know’ の意味を表わしており、不定詞を伴う場合も同様の意味にとれ、‘to know how to do’ と解することができる。他方 ModE では、不定詞を伴う用法が一般化して、*can* は広く ability を表わすようになっており、それと同時に possibility を表わすことも多い。一応これだけの意味に限って、図示してみるとつぎのようになる⁽⁵⁰⁾。

	‘know’ ⁽⁵¹⁾	‘be able’	‘be possible’
OE <i>cunnan</i>	×	—	—
ModE <i>can</i>	—	×	×

これが OE *cunnan* から ModE *can* への変遷の大略を伝えるのであるが、一の部分はいかなる語が表わしたかを考えなければ十分な理解はできない。そこで ModE *know* と OE *magan* を取ってみると大体以下のようである。

	‘know’	‘be able’	‘be possible’
ModE <i>know</i>	×	—	—
OE <i>magan</i>	—	×	×

今この二つを組み合わせれば、

(49) Cf. “any historical statement contains, avowedly or otherwise, at least two synchronic statements—one for each of two or more stages—already” (Hoenigswald, *Language Change and Linguistic Reconstruction*, p. 3, n. 5.)

(50) 以下図示の仕方については Hoenigswald (*op. cit.*, pp. 15 ff.) からヒントを得た。×印は左欄の語に、その項に該当する意味があることを、—はそれかないことを示す。

(51) 不定詞を伴って ‘know how to’ と解される場合も含む。

	'know' 'be able' 'be possible'		
OE <i>cunnan</i>	×	—	—
<i>magan</i>	—	×	×
<hr/>			
ModE <i>know</i>	×	—	—
<i>can</i>	—	×	×

のようになり、*cunnan*—*can* の発達をみるだけでも、少なくともこれだけのことを考える必要があることがわかる。

また OE *magan* から ModE *may* への発達をみると、概略つぎのようなことが考えられる。

	'be able' 'be possible, ⁽⁵²⁾ permitted'	
OE <i>magan</i>	×	(×)
ModE <i>may</i>	—	×

ここで ModE *can* と OE *mōtan* を考え合わせるとつぎのような図が得られる。

	'be able' 'be possible, permitted'	
OE <i>magan</i>	×	(×)
<i>mōtan</i>	—	×
<hr/>		
ModE <i>can</i>	×	×
<i>may</i>	—	×

つぎに OE *āgan* については、Mod E において、*owe* と *ought* に分化しているために事情はやや複雑であるが、ここでも概略を示せば

(52) 実はこのなかで subjective possibility は OE にはみられないので OE については (×) を用いる。

以下のように考えることができると思う。

	'have' 'have to pay' 'be obliged'		
OE <i>āgan</i>	×	(×)	(×)
ModE <i>owe</i>	—	×	—
ModE <i>ought</i>	—	—	×

これに ModE *have* と OE *sculan* を考え合わせて図示すれば、

	'have' 'have to pay' 'be obliged'		
OE <i>āgan</i>	×	(×)	(×)
<i>sculan</i>	—	×	×
<hr/>			
ModE <i>have</i>	×	—	—
<i>owe</i>	—	×	—
<i>ought</i>	—	—	×

また *shall*, *will* が ModE において未来を表わす Empty word と化していると仮定して、これらの語を歴史的に考える場合に、最も顕著な用法のみに着目すれば以下のような図が一応考えられる。

	future	obligation	volition
OE present	×	—	—
<i>sculan</i>	—	×	—
<i>willan</i>	—	—	×
<hr/>			
ModE <i>shall</i>	×	—	—
<i>will</i>	×	—	—
<i>should</i>	—	×	—
<i>would</i>	—	—	×

以上のような考え方には、極端な概括化と、具体性の喪失の危険があるが、私が考えている歴史的研究の骨子を示すことはできたと思う⁽⁵³⁾。

3. 3. それでは英語におけるいわゆる法助動詞の歴史的研究を行なうためにはどれだけの表現を取り上げるべきであろうか。このことを明らかにするためには、OE から現代英語にいたる各時期における、いわゆる法助動詞の意味・用法を考察し、そういった意味を表わす他の表現を調べてみなければならない。このような方向への一つの試みとして、私は以下において、ほぼ等質的な文脈における各時期の状況を知ることができるという便宜のために、*Anglo-Saxon* (c 995), *Wycliffe* (c 1389), *Tyndale* (1526), *Authorized Version* (1611), *Revised Version* (1881), *Revised Standard Version* (1946)⁽⁵⁴⁾の6種の英訳聖書におけるマタイ伝を取り上げ、この6種の翻訳のいずれかに *can*, *may*, *must*, *ought*, *shall*, *will* が用いられている部分について考察しようと思う。これによって法助動詞の歴史的研究への一つの手がかりが得られるであろう。*Anglo-Saxon* 訳は *Vetus Italica* から、*Wycliffe* 訳は *Vulgate* からの、いずれもラテン語からの訳であるのに対して、*Tyndale* 以降のものはギリシャ語からの訳であるということ、また後のものは既存のものに影響されることが大きく、しかもその性質上当然やや古風であって、その時代の英語の実状を示しているとはいえないことなどによって、聖書を用いることには難点もあるが、上述のような利点も認めねばならない。なお本文では一部の例しかあげることができないので、全体を概観し得るように、附録として簡略な対照表を加えることにした。

つぎの表で各語がどの位用いられているかを示しておく⁽⁵⁵⁾。

(53) 個々の語の変遷の詳細については *OED* および註 (1) に挙げた拙稿を参照されたい。

(54) 以下それぞれ AS, W, T, AV, RV, RSV と略記する。

(55) 表の左欄には便宜上 ModE の語形をあげる。なお *ought* と *owed* を分けたのは、AV まででは *ought* (OE *āhte*) のみであるが、RV と RSV ではこの二つの働きが分化しているからである。また AS, W にみられる *nyl*, *nelle*, *nolde* などの contracted form は *will*, *would* に含める。また T, AV には *shalbe* という形があり、また *cannot* は T 以後においてふつうである。これらの contracted form は区別しない。T, AV には *shalbe* (=shall be) なる形

	AS c 995	W c 1389	T 1526	AV 1611	RV 1881	RSV 1946
<i>can</i>	6	1	25	20	18	21
<i>could</i>	2	0	6	3	4	5
<i>may</i>	25	23	14	15	14	14
<i>might</i>	7	6	11	20	19	9
<i>mote</i>	3	0	0	0	0	0
<i>must</i>	0	0	5	5	6	11
<i>owe</i>	2	4	1	1	1	1
<i>ought</i>	1	2	5	4	2	2
<i>owed</i>	0	0	0	0	2	2
<i>shall</i>	6	459	375	371	358	80
<i>should</i>	3	38	33	26	24	6
<i>will</i>	47	57	83	94	78	260
<i>would</i>	16	13	24	22	28	23
<i>willing</i>	0	1	0	1	3	3
Total	118	604	582	582	557	437

3. 4. 1. AS で *cunnan* が (代) 名詞の目的語を伴っている場合は、W 以下すべてにおいて *know* が用いられている (prs. 11: 27¹, 11: 27², 22: 29, 25: 12, pt. 26: 72, 26: 74).

11: 27^{1(56)}} AS *nán man ne can ðone sunu, búton fædyr*
 W *no man knewe the sone, no but the fadir*
 T *no man knoweth the sonne, but the father*
 AV *no man knoweth the sonne but the father*
 RV *no one knoweth the Son, save the Father*
 RSV *no one knows the Son except the Father*

AS で *cunnan* が不定詞を伴う場合が二つあり (7: 11¹, 16: 3²), W では前者は *han knowen for to*, 後者は *han knowe to*, T では

があり (T には *wil'be* もある), T 以後には *cannot* があるが, これらは *shall, can* に含めた。
willing は他との比較のために加え, *unwilling* もこのなかに含めた。

(56) 11: 27 はマタイ伝 11 章 27 節を示し, 27¹ の肩の数字 1 は 27 節に本稿で取り扱ふ語が 2 回以上現われ, その第 1 のものであることを示す。

cann と *can*, AV では *know how to* と *can*, RV, RSV ではすべて *know how to* である。

W には *can* は一つだけであるが, その箇所は AS では *witan*, T 以降では *can* である。

- 27: 65 AS farap, and healdap swá swá ge witon
 W go 3e, kepe 3e as 3e kunnen
 T go, and make ytt as sure as ye can
 AV goe your way, make it as sure as you can
 RV go your way, make it as sure as you can
 RSV go, make it as secure as you can

AS, W 共に *wit(an)* が用いられているつぎの例がこれと比較される。

- 21: 27¹ AS We nyton.
 W We witen nat.
 T We cannot tell.
 AV We cannot tell.
 RV We know not.
 RSV We do not know.

3. 4. 2. T 以降における *can* のなかで, 上記のもの (T では 7: 11¹ と 16: 3²; AV では後者のみ) 以外は AS の *cunnan* に対応していない。(W における *can* は上記 27: 65 のみ。) 大多数である 17 例において T, AV, RV, RSV すべての *can* が等しく AS *magan*, W *may* に対応している⁽⁶⁷⁾ (prs. 5: 14, 5: 36², 6: 24¹, 6: 24⁴, 6: 27, 7: 18¹, [7: 18²], 8: 2², 12: 29¹, 12: 34, 16: 3³, 19: 25, 26: 53¹, 27: 42¹; pt. 17: 16, 17: 19, 26: 40; 26: 42 では AV のみ *may*).

(67) 8: 28 においては AS から AV まで *may*, RV RSV で *can* である (いずれも pt.).

5: 14 AS ne mæg seo ceaster beon behýd ðe byp uppán múnt
áset

W a citee putt on an hill may not be hid

T a cite that is set on an hill cannot be hid

AV A citie that is set on an hill, cannot be hid

RV, RSV A city set on a hill cannot be hid

6: 24 AS Ne mágon ge Gode peowian and woruldwelan

W ȝe mowen nat serue to God and richessis

T Ye can nott serve God and mammon

AV Ye cannot serue God and Mammon

RV Ye cannot serve God and mammon

RSV You cannot serve God and mammom

AS *magan*, W *may* に対して *be able to* が用いられていることもある (9: 28, 20: 22¹, 20: 22⁴ では T 以下すべて *be able to*; 19: 12, 22: 46¹, 26: 61 では T のみ *can*; 10: 28², 10: 28³ では RSV のみ *can*).

9: 28 AS Gelyfe gyt, ðæt ic inc mæg gehélan ?

W Bileeve ȝe, that I may do this thing to ȝou ?

T Beleve ye, that I am able to do thys ?

AV Beleeve ye that I am able to do this ?

RV Believe ye that I am able to do this ?

RSV Do you believe that I am able to do this ?

22: 46¹ AS Dá ne mihton hig him nán word andswarian

W And no man miȝt answeare a word to hym

T And none of th̅om coulde answeare him ageyne one
worde

AV And no man was able to answe're him a word

RV, RSV And no one was able to answer him a word

10: 28² AS ondræðap má ðone, ðe mæg sáwle and líchaman
fordón on helle

W rather dreede ge hym, that may lese soule and body
in to helle

T rather feare him, which is able to destroye both
soule and body in hell

AV rather feare him which is able to destroy both so-
ule and body in hell

RV rather fear him which is able to destroy both soul
and body in hell

RSV rather fear him who can destroy both soul and
body in hell

T 以降で *possible* が用いられる例が一つある。

24: 24³ AS gyf hyt beon mæg

W if it may be don

T yff it were possible

AV if it were possible

RV, RSV if possible

12: 26, 26: 54¹ では AS *magan* が後の *shall (will)* に対応して
いる⁽⁵⁸⁾。

12: 26 AS hú mæg ðonne hys rice standan ?

W therefore hou shal his kyngdam stonde ?

(58) これらは *possibility* を表わしていると考えられるが、これに類した 26: 9 の例では AS
から RSV まですべてに *might* が用いられている。

T howe shall then hys kyngdom endure ?
 AV how shall then his kingdome stand ?
 RV how then shall his kingdom stand ?
 RSV how then will his kingdom stand ?

26: 54 AS Hú mágon beon gefyllede ða hálgan gewritu…?
 W Hou therefore shulen the scripturis be fulfilled ?
 T Howe then shall the scriptures be fulfilled ?
 AV But how then shall the Scriptures be fulfilled…?
 RV How then should the scriptures be fulfilled…?
 RSV But how then should the scriptures be fulfilled…?

5: 13³, 16: 18² では AS *magan* は本動詞として ‘be strong, have power, prevail’ の意味を表わしている。

5: 13³ AS Hit ne mæg syððan to náhte
 W To no thing it is worth ouer
 T It is thenceforthe goode for nothyng
 AV It is thenceforth good for nothing
 RV it is thenceforth good for nothing
 RSV it is no longer good for anything

16: 18² As helle gatu ne mágon ongén ða
 W the 3atis of helle shulen nat han mizt azeins it
 T the gates off hell shall nott prevayle a genst it
 AV the gates of hell shall not preuaile against it
 RV the gates of Hades shall not prevail against it
 RSV the powers of death shall not prevail against it

以上のことから大体つぎのようなことがいえる。

(1) AS *cunnan* は(代)名詞を目的語として伴うことがふつうで、大体 W 以降の *know* に対応する。

(1') AS *cunnan* が不定詞を伴うことは少なく、その場合 W では *know (for) to*, T では *can*, AV では *can* または *know how to*, RV, RSV では *know how to* である。

(2) AS *magan* は多くの場合 W *may*, T 以降では *can* に対応する。

(2') AS *magan*, W *may* に対して T 以降で *be able to* の場合も少なくない。

(2'') AS *magan* には本動詞として 'be strong, have power, prevail' の意味を表わす場合があり、W 以降では種々の表現がとられている。

この記述の範囲内で、'know' および 'be able' の意味を表わすおもな語を考えると、ほぼつぎのようになる⁽⁵⁹⁾。

	AS o 995	W o 1389	T 以降 1526—
'know'	<i>cunnan</i>	<i>know</i>	<i>know</i>
'be able'	<i>magan</i>	<i>may</i>	<i>can, be able</i>

3. 5. AS *magan*, W *may* についてはすでにのべたが、T 以降では *may* は Final clause に現われることが多い。T 以降の版で Final clause と解される例(1: 22, 2: 8, 2: 15, 2: 23¹, 4: 1, 4: 14, 5: 16, 5: 45, 6: 1¹, 6: 4¹, 6: 5³, 6: 16², 6: 18¹, 8: 17, 9: 6, 12: 10, 12: 17, 13: 35¹, 14: 15, 14: 36, 18: 16², 19: 13, 19: 16², 21: 4, 21: 34, 23: 26, 23: 35, 24: 1, 26: 56, 26: 58, 26: 59, 27: 26, 27: 35)のうちイタリックで示した9箇所では T 以下すべてに *may* が用いられている。その他ではいずれかに *to*-infinitive (T 12, AV 2, RV 1, RSV 11)あるいは Subjunctive (T 1, AV 2, RV 1) が用いられている。これに対応するものは、AS では2例(*wolde* 22: 15; *woldon* 26: 4)

(59) W における *can* についてはマタイ伝だけからは何もいえないが Lindberg (ed.), *MS. Bodley 959. Volume 1: Genesis & Exodus* の Glossary (s. v. *cunne*) に 'know' の意味だけが記されていることは一つの参考になる。

を除いてすべて Subjunctive, W では Subjunctive (13) および過去の場合の *shoulde(n)* (13) である。AS, W では *magan*, *may* は用いられていない。そこで種々の組み合わせがあるわけだが、最も多いのは AS, W が Subjunctive で T 以下が *may* の場合である (5: 16, 5: 45, 6: 16², 9: 6, 18: 16², 23: 26, 23: 35)。

- 5: 16 AS Swá onlihte eower leoht befóran mannum, ðæt hi geseon eowre góðan weorc
 W So shyne zoure lizt before men, that thei see zoure good werkis
 T Se that youre light so shyne before men, that they maye se youre good workes
 AV Let your light so shine before men, that they may see your good workes
 RV Even so let your light shine before men, that they may see your good works
 RSV Let your light so shine before men, that they may see your good works

マタイ伝には、AV で *that it might be fulfilled* となっている、過去の *purpose* を表わす文句が 9 回 (1: 22, 2: 15, 2: 23¹, 4: 14, 8: 17, 12: 17, 13: 35¹, 21: 4, 27: 35; なお 26: 56 も類似のもの) あるが、そのうちイタリックスのものは、各版においてつぎの例と同様である。

- 1: 22 AS Sóplice eal ðys wæs geworden, ðæt gefylled wære, ðæt fram Drihtne gecweden wæs purh ðone wítegan
 W Forsothe al this thing was don, that it shulde be fulfillid, that thing that was seid by a prophete
 T All thys was done to fulfill that which was spoken of the lord be the prophet

- AV Now all this was done, that it might be fulfilled
which was spoken of the Lord by the Prophet
- RV Now all this is come to pass, that it might be fulfilled
which was spoken by the Lord through the
prophet
- RSV All this took place to fulfil what the Lord had spoken
by the prophet

概括的にいえば Final clause においては, T 以降では *may* が *to*-infinitive がふつうで Subjunctive はまれであり, AS ではほとんどが Subjunctive である。また W では, 現在では Subjunctive, 過去では *shoulde(n)* がふつうである。しかし例外もある。

(1) RSV 以外ですべて Subjunctive の場合

- 6: 18¹ AS Ðú sóþlice ðonne ðú fæste, smýra ðín heafod, and
pweah ðíne ansýne, Ðæt ðú ne sý gesewen fram
mannum fæstende, ac ðinum fæder
- W But wham thou fastist, anoynte thin hede, and washe
thi face, That thou be nat seen fastyng to men,
but to thi fædir
- T But thou when thou fastest, annoynthe thyne heed,
and washe thy face, That it appere nott vnto men
howe that thou fastest, but vnto thy father
- AV But thou, when thou fast, anoint thine head, and
wash thy face: That thou appeare not vnto men
to fast, but vnto thy father
- RV But thou, when thou fastest, anoint thy head, and
wash thy face; that thou be not seen of men to
fast, but of thy Father
- RSV But when you fast, anoint your head and wash your
face, that your fasting may not be seen by men but

by your Father

(2) すべての版で *to*-infinitive の場合

27: 31 AS hig……læddon hyne to áhónne

W thei……ledden hým for to crucife

T they……leed hym away to crucify hym

AV, RV, RSV they ……led him away to crucify him

T 以降において *may* が Final clause 以外に用いられることは少なく、その場合も意味の上から Final clause に似たものもあり、その他の例でも possibility を表わすといえることができるそこで Final clause に限って、3. 4 の表に加えてみるとつぎのようになる。

	AS c 995	W c 1389	T 以降 1526—
'know'	<i>cunnan</i>	<i>know</i>	<i>know</i>
'be able'	<i>magan</i>	<i>may</i>	<i>can, be able</i>
purpose	subj.	subj(主にprs.), <i>shulde</i>	<i>may, to-inf.</i>

W が *cunnan* に対応する語の点で T 以降に近く、*may* の用法の点で AS に近いことは 3. 4 までで一応推察されたが、purpose の場合を加えて、T 以降における *may* の用法が大体わかったために、そのことが一層よく理解できる。

3. 6. 1. AS では *mōtan* の例は三つにすぎないが、それだけでも当時の用法がかなりよくわかれる。

(1) possibility or future

8: 25 AS Drihten, hæle us; we móton forwurðan.

W Lord, saue vs; we perishen.

T Master, save vs; we perishe.

AV Lord, saue vs; we perish.

RV Save, Lord; we perish.

RSV Save, Lord; we are perishing.

(2) permission

- 20: 15¹ AS Oððe ne mót ic dón ðæt ic wylle?
 W Wher it is nat leful to me for to do that I wole?
 T Ys yt not lawfull ffor me to do as me listeth with myne awne?
 AV Is it not lawfull for mee to doe what I wil with mine owne?
 RV Is it not lawful for me to do what I will with mine own?
 RSV Am I not allowed to do what I choose with what belongs to me?

(3) obligation

- 18: 21² AS Drihten, gyf mín bróðor syngap wið me, mót ic him forgyfan?
 W Lord, hou ofte shal my brother synne in me, and I shal forgeue hym?
 T Master, howe ofte shall my brother trespas ageynst me, and I shall foryeve hym?
 AV Lord, how oft shall my brother sinne against mee, and I forgiue him?
 RV Lord, how oft shall my brother sin against me, and I forgive him?
 RSV Lord, how often shall my brother sin against me, and I forgive him? ⁽⁶⁰⁾

3. 6. 2. AS には *mōtan* の過去形はなく, W には現在・過去共にない。T 以降には現在形はなく, 現在用法の *must* のみである。T 以

(60) Cf. フイツ語訳: Herr, wie oft muss ich denn meinem Bruder, der an mir sündigt, vergeben?

降のすべてで *must* が用いられている例が四つ (16: 21¹, 17: 10, 24: 6², 26: 54²) あるが, W ではすべて *it bihoueth* (or *-ith*), AS では 17: 10, 26: 54² では非人称の *gebyrian*, 16: 21¹ では *wolde*, 24: 6² では *scolon* である。

26: 54² AS Hú mágon beon gefyllede ða hálgan gewritu, ðe be me áwritene synt? forðam ðus hyt gebyrap to beonne.

W Hou therefore shulen the scripturis be fulfillid? for so it behoueth to be don.

T Howe then shall the scriptures be fulfilled? for so muste it be.

AV But how then shall the Scriptures be fulfilled, that thus it must be?

RV How then should the scriptures be fulfilled, that thus it must be?

RSV But how then should the scriptures be fulfilled, that it must be so?

24: 6² AS ðás ping sceolon geweorðan

W forsoth it bihoueth thes thingis to be don

T for all these things muste come to passe

AV for all these things must come to passe

RV for these things must needs come to pass

RSV for this must take place

この他, AS—RV で Imperative または *shall* の場合 (5: 48, 6: 5², 24: 44¹, 26: 35¹) があるが, RSVでは (18: 7 を除いて) すべて *must* である。一例をあげれば,

- 5: 48 AS Eornustlice beop fulfremede, swá eower heofonlica fæder is fullfremed.
 W Therefore be zee parfit, as and zoure heuenly fadir is parfit.
 T Ye shal therfore be perfecte, even as youre hevenly father is perfecte.
 AV Be yee therefore perfect, even as your father, which is in heauen, is perfect.
 RV Ye therefore shall be perfect, as your heavenly Father is perfect.
 RSV You, therefore, must be perfect, as your heavenly Father is perfect.

また RSV の *must* に対応するものが AS の Subjunctive である場合もある (20: 27², 22: 24).

- 20: 27² AS And se ðe wyle betweox eow beon fyrmost, sý he eower peow.
 W And who euere amonge zou wole be firste, he shal be zoure seruaunt.
 T And whosoever wilbe chefe, let him be youre servaunt.
 AV And whosoeuer will be chiefe among you, let him be your seruant.
 RV and whosoever would be first among you shall be your servant.
 RSV and whoever would be first among you must be your slave

以上のことから Mod E *must* の表わす意味を基にして各版におけるおもな表現をまとめてみるとつぎのようになる。

	AS	W	T, AV	RV	RSV
'must'	<i>hyt gebyre þ</i>	<i>ut behoueth</i>	<i>must</i>	<i>must</i>	<i>must</i>
	<i>sculan</i>	<i>shall</i>	<i>shall</i>	<i>shall</i>	
	imp.	imp.	imp.	imp.	
	subj.		<i>let</i>		
	<i>mōtan</i>				

3. 7. 1. AS において *āgan* は 3 回現われるが、いずれも本来の possession の意味を表わしている (5: 5, 18: 25², 24: 47²)。一例だけあげれば、

18: 25² AS *eall ðæt he áhte*
 W *alle thingis that he hadde*
 T, AV, RV, RSV *all that he had*

3. 7. 2. AS において W 以降の 'have to pay' の意味の *owe* に対応するものは *sculan* (18: 24, 18: 28¹, 18: 28²)、その他の表現 (23: 16³ *ys scyldig*; 23: 18³ *ys gyltig*) である。この意味の過去形は W *owzte, owzte*; T, AV *ought* であるが RV, RSV では *owed* であって、後述の *ought* と区別されている。

18: 24 AS *him wæs án broht, se him sceolde tyn púsend púnda*
 W *oon was offrid to hym, that owzte to hym ten thousand talentis.*
 T *won was browghte vnto hym, whiche ought hym ten thousande talenttes*
 AV *one was brought vnto him which ought him ten thousand talents*
 RV *one was brought unto him, which owed him ten thousand talents*

RSV one was brought to him who owed him ten thousand talents

23: 16² AS swá hwá swá swerep on ðæs temples golde, se ys scyldig

W he that shal swere in the gold of the temple, ow-ith

T whosoever sweare by the golde of the temple, he is detter

AV whosoer shal sweare by the gold of the Temple, he is a debter

RV whosoever shall swear by the gold of the temple, he is a debtor

RSV if any one swears by the gold of the temple, he is bound by his oath

3. 7. 3. RV, RSV で *owed* と区別された *ought* に対応するものは AS *hyt gebyrede*, W *it behofte, bihouyde*, T, AV *ought* である (23: 23, 25: 27¹).

23: 23 AS Ðás ping hyt gebyrede ðæt ge dydon

W And these thingis it behofte for to do

T These ought ye to have done

AV these ought ye to haue done

RV but these ye ought to have done

RSV these you ought to have done

3・14 では AS *seal*; W *owe for to*; T *ought to*; AV *haue need to*; RV *have need to*; RSV *need to*. 3. 6. 2 でみたように AS *hyt gebyrep*, W *it behoueth* は T 以降の *must* にも対応している。 *must, ought* い

ずれの場合もラテン語 (*Vulgate*) では *oportet* である⁽⁶¹⁾。そこで *must* をも加えて、possession, ‘have to pay’, ‘oportet’ の意味を表わすおもな語を示せば、

	AS	W	T, AV	RV, SRV
possession	<i>āgan</i>	<i>have</i>	<i>have</i>	<i>have</i>
‘have to pay’	<i>sculan</i>	<i>owe (owzte)</i>	<i>owe (ought)</i>	<i>owe (owed)</i>
‘oportet’	<i>hyt gebyrep</i> <i>sculan</i> <i>mōtan</i>	<i>it behoueth</i> <i>shall</i> <i>owe</i>	<i>must</i> <i>ought</i> <i>shall</i>	<i>must</i> <i>ought</i> (<i>shall</i>)

3. 8. 1. AS では *sculan* が 9 回しか用いられていない。そのうち 3 例 (18: 24, 18: 28¹, 18: 28²) は ‘owe’ の意味であり、4 例 (3: 14, 11: 3², 24: 6², 26: 35¹) は obligation or necessity を表わしている。これらについては 3. 6. 2, 3. 7. 2, 3. 7. 3 でのべた。残る 2 例のうち、9: 15¹ は *Vulgate* で *possunt* であり、20: 10 は *And þá þe árest comon, wéndon, þæt hig sceoldon máre onfón, þá onféngon hig syndrige penegas* (*Vulg.* ‘Venientes autem et primi, arbitrati sunt quod plus essent accepturi; acceperunt autem et ipsi singulos denarios.’) であって、futurity を表わすとみてよいと思われる⁽⁶²⁾。W 以降では、

W the firste cummynges demeden, that thei weren to take more

T Then cam the fyrst supposyng that they shulde receive mooare

AV when the first came, they supposed that they should haue

(61) Visser によれば More において *must* は大抵の場合 *oportet* の訳であるが、*oportet* は *it behoueth* にも、またときおり *ought* にも訳されている (*A Syntax of the English Language of St. Thomas More*, § 525)

(62) ちょうどこの箇所か *Sweets Anglo-Saxon Primer* (rev. Davis, p. 50) で ‘Simple futurity appears most clearly in the preterite *wolde* and *scolde* in indirect speech’ という説明の実例として挙げられている。

received more

RV when the first came, they supposed that they would receive more

RSV when the first came, they thought they would receive more

AS に比して W—RV に *shall* が圧倒的に多いのは, futurity を表わすのに, AS ではもっぱらとっていいほど Indicative present が用いられているからである⁽⁶³⁾. また *shall* が RSV に少ないのは, 主としていわゆる Prophetic *shall* を除いて, futurity を表わすのに多く *will* が用いられているからである. Futurity を表わす *shall*, *will* については詳しい研究が多いので, 本稿ではこれ以上立ち入らないことにする. つぎに引用する Franz の言葉のなかにはマタイ伝への言及がある. “Ansätze zu der periphrastischen Form nach moderner Art (I shall go) sind im Altenglischen indessen bereits vorhanden. Sie erstarkt rasch im Mittelenglischen und zwar wird seit dem 13. Jahrhundert *shall* zur Futurbildung weitaus am häufigsten gebraucht. Bis in die elisabethanische Zeit bleibt die *shall*-Form die herrschende. In der Wyclif-Purvey-Übersetzung des Matthäusevangeliums kommt sie fast ausschließlich vor, und der weit volkstümlichere und sprachlich feiner empfindende Tyndale (1525) verwendet *shall* zur Futurbildung fast in demselben Umfang wie Wyclif-Purvey. *Will* kommt erst im spätmittelenglischer Zeit ausgiebiger zur Verwendung.”⁽⁶⁴⁾ Blackburn によると the late Wycliffite Version のマタイ伝では *Vulgate* の future が

(63) “Wie alle germ. Sprachen hat das Ae. kein durch Flexionsendungen gekennzeichnetes Futurum. Gewöhnlich wird die zukünftige Handlung durch das bloße Präsens (Indikativ, manchmal Optativ) ausgedrückt.” (Brunner, *Die englische Sprache*, II. p. 269) なお Verbum substantivum の場合は *bēon* が futurity を表わすのに用いられていることが多い (Cf. Campbell, *Old English Grammar*, p. 350). しかし Subjunctive のときは *wesan* かふつである. これについては附表で括弧内に示した.

(64) Franz, *Die Sprache Shakespeares*, § 611.

322 回 *shall* で訳されている。他方 Wycliffe は *will* をラテン語の *volo* を訳すのに用いている⁽⁶⁵⁾。

3. 8. 2. Futurity の表現以外の点で、W 以降の *shall* について著しいことは、それが AS の Imperative に対応することがかなり多いことである。否定の命令文で W において *nyl(e)* が用いられている場合は 3. 9. 2 で取り上げるので除いて、その他の場合で、W 以降のいずれかに *shall* が用いられている AS Imperative の例 (5: 21¹, 5: 24, 5: 27¹, 5: 33¹, 5: 36¹, 5: 43, 5: 48, 6: 5², 6: 9, 7: 5, 16: 11, 19: 18¹, 19: 18², 19: 18³, 19: 18⁴, 19: 19, 21: 3², 22: 37, 22: 39, 24: 44¹) のなかで、イタリックスの箇所では W 以降すべてに *shall* が用いられている。これらはいずれも *Thou shalt (not)……* という道徳的な命令である。一例をあげれば、

- 5: 27 AS Ne unriht-hæme ðú.
W Thou shalt nat do lecherye.
T Thou shalt nott committ advoutrie.
AV Thou shalt not commit adulterie.
RV Thou shalt not commit adultery:
RSV You shall not commit adultery.

これら以外では W 以降で *shall* または Imperative が用いられている (ただし 5: 48, 6: 5², 24: 44¹ では RSV で *must*)。

3. 8. 3. AS で Subjunctive が Final clause に用いられて、それが主として W では Subjunctive または *shulde*, T 以降では *may* または *to*-infinitive に対応することについては 3. 5 でのべた。ここで AS の Subjunctive が W 以降のいずれかにおける *shall* に対応する場合をみようと思う。このような例がマタイ伝には 59 みられる。

1. Principal sentence (prs. 5: 37, 7: 19¹, 15: 4, 16: 22, 21: 38;

(65) Jespersen, *A Modern English Grammar*, IV. 18. 1 (1); なおこの問題については Fridén, *Studies on the Tenses of the English Verb from Chaucer to Shakespeare*, p. 123 ff. 参照。

pt. 23 : 30, 24 : 22², 25 : 27²)

- 15 : 4 AS se ðe wyrigp hys fæder and módor, swelte se deape
 W he that cursith fadir or modir, dye he by deth
 T he that speaketh evyll ayeynst hys father or mother,
 shall suffer deeth
 AV hee that curseth father or mother, let him die the
 death
 RV He that speaketh evil of father or mother, let him
 die the death.
 RSV He who speaks evil of father or mother, let him
 surely die.

(Cf. 5 : 31 AS prs. subj. ; W prs. subj. ; T—RSV *let*)

- 16 : 22 AS Drihten, ne gewurðe ðæt.
 W Fer be it fro thee, Lord ; this thing shal not be
 to thee.
 T Master, faver thy selfe ; this shall not come vnto
 the.
 AV Bee it farre from thee Lord : This shal not be vnto
 thee.
 RV Be it far from thee, Lord : this shall never be
 unto thee.
 RSV God forbid, Lord ! This shall never happen to you.

- 24 : 22² AS búton ða dagas gescyrte wáeron, nære nán mann
 hál geworden
 W no but tho dayes hadden be breggid, al fleisch
 schulde not be maad sauf
 T except those dayes shulde be shortened, shoulde

no fesse be saved

AV except those dayes should be shortned, there should no flesh be sauēd

RV except those days had been shortened, no flesh would have been saved

RSV if those days had not been shortened, no human being would be saved

2. Dependent clause

i) Indirect narration (Indirect question 2: 4, 6: 25¹, 6: 25³, 10: 19³, 10: 19⁵, 24: 3¹, 24: 3²; *wénaþ ðæt* 6: 7², *wénst du ðæt* 26: 53²)

ii) *ðæt*-clause¹ (*ðé ys betere ðæt* 5: 29¹, 5: 30¹; *betere him ys ðæt* 18: 6³, 18: 6⁴ *ne eom ic wyrðe ðæt* 8: 8¹)

iii) *ðæt*-clause² (*bebead ðæt* 15: 35, 16: 20; *bædon ðæt* 8: 34, 16: 1; *biddaþ ðæt* 9: 38; *nys willan*…… *ðæt* 18: 14; *nýddon ðæt* 27: 32)

iv) Relative clause (10: 26¹, 10: 26², 12: 11², 14: 7², 15: 32¹, 21: 41³, 22: 9, 24: 2²)

v) Temporal clause (*ðonne* 6: 5¹; *ær* 16: 28²; *ærðam ðe* 23: 39²; *oð ðæt* 18: 30², 18: 34)

vi) Final clause (T 以降で *may* の場合は 3. 5 にあげた; *ðæt*……*ne* 17: 27¹; *ðe-læss* 13: 15¹, 13: 15³, 13: 15⁴, 13: 15⁵)

vii) Consecutive clause (*swá*……*ðæt* 15: 33²)

viii) Conditional clause (*gyf* 5: 39, 21: 3¹; *búton* 5: 20¹, 12: 29², 12: 29³, 18: 3¹, 24: 22¹)

ix) Concessive clause (*ðeah* 16: 26², 26: 33¹)

x) Comparative clause (*ðonne* 5: 29², 5: 30²)

これらの Dependent clause についてのみ, AS の Subjunctive に

対応する各版の表現をみるとつぎのようである。

	W	T	AV	RV	RSV
<i>shall</i>	24	29	34	31	6
Subjunctive	24	12	6	7	4
Indicative	1	1	1	2	11
<i>will</i>	0	2	5	2	8
<i>to-inf.</i>	1	5	4	4	13
<i>be to</i>	0	0	0	0	3
<i>may</i>	0	1	0	1	2

3. 5 でのべた Final clause のうち AS で Subjunctive, T 以降のいづれかで *may* の場合は以下の通りである。

	W	T	AV	RV	RSV
Subjunctive	13	1	2	1	0
<i>shulde</i>	12	0	0	0	0
<i>may</i>	0	15	24	26	18
<i>to-inf.</i>	0	12	2	1	10

つぎに Dependent clause の例を二三あげる。

- 5: 30^{1,2} AS witodlice ðe ys betere, ðæt án ðinra lima for-wurðe, ðonne eal ðin líchama fare to helle
- W for it spedith to thee, that oon of thi membris perishe, than that al thi body go in to helle
- T better hyt ys, that one off thy membres perisshe, then that all thy body shulde be caste in to hell
- AV For it is profitable for thee that one of thy members should perish, and not that thy whole body should be cast into hell
- RV for it is profitable for thee that one of thy members should perish, and not thy whole body go into hell

RSV it is better that you lose one of your members
than that your whole body go into hell

17: 27 AS ðæt we hí ne ge-unrótsigeon, gang to ðære sæ
W that we sclaundre nat hem, go thou to the see
T lest we shulde offende them, go to the see
AV least we should offend them, goe thou to the Sea
RV lest we cause them to stumble, go thou to the sea
RSV not to give offence to them, go to the sea

18: 30 AS oð ðæt he him eall ágefe
W til that he paide al the dette
T tyll he shulde paye the dett
AV till hee should pay the debt
RV till he should pay that which was due
RSV till he should pay the debt

24: 31,2 AS Sæge us, hwænne ðás ping gewurðon, and hwylc
tác n sí ðínes tocymes
W Seie to vs, whanne thes thingis schulen be, and what
tokene of thi comynge
T Tell vs, when this shalbe, and what signe shalbe of
thy comminge
AV Tell vs, when shall these things be? and what shall
be the signe of thy comming……?
RV Tell us, when shall these things be? and what shall
be the sign of thy coming……?
RSV Tell us, when will this be, and what will be the
sign of your coming……?

大体において AS の Subjunctive に対して, W では *shall* と Subjunctive がほぼ半々であり, T, AV, RV では *shall* が多く, RSV ではこれらは少なく, *will* がかなりあるということがいえる. また ModE では *should* が現在に用いられることが多くなる. しかし *shall* にしても場合によってニュアンスが異なり, 単に形態上の対応から AS の Subjunctive にかわるものと考えすることはできない. 一例を挙げれば 6: 25¹, 25², 25³; 10: 19³, 19⁵ において *what* に導かれる間接疑問で AS の Subjunctive に対応する *shall* (10: 19³, 19⁵ で RSV では *are to*) は明らかに obligation を表わし, 17: 17¹, 17² の疑問文 (AS Indicative; W—RV *shall*; RSV *am to*) と同様のものと考えられる.

以上のことを簡単にまとめるとつぎのようになる.

	AS	W	T, AV, RV	RSV
'owe'	<i>seulan</i>	<i>owe</i>	<i>owe</i>	<i>owe</i>
obligation	<i>seulan</i> <i>hyt gebyre p</i>	<i>shall</i> <i>it behoweth</i>	<i>ought</i> <i>must</i>	<i>ought</i> <i>must</i>
command	imp.	<i>shall</i> imp.	<i>shall</i> imp.	<i>shall</i> imp. <i>must</i>
(Subjunctive)	subj.	<i>shall</i> subj.	<i>shall</i> subj. <i>may</i> ind.	ind. <i>will</i> <i>may</i> <i>shall</i>
futurity	prs. ind.	<i>shall</i>	<i>shall</i> <i>will</i>	<i>will</i> <i>shall</i>

3. 9. 1. AS には *willan* の例が 63 あり (そのうち 20 は否定の *nyllan* であるが), ほとんどすべての場合に volition を表わしている.

否定の命令を表わす *nellan* (11 例) について後にのべるとして, その他の 52 例について, AS *willan* に対応する W 以下の表現をみるとつぎの如くである.

1. Present (36)

i) *wylle*, etc. (33)

	W	T	AV	RV	RSV
<i>will</i>	28	24	28	14	6
<i>would</i>	2	3	3	11	8
<i>be to</i>	2	0	0	0	0
<i>shall</i>	1	2	0	1	0
volitionを表 わす動詞など	0	3	0	5	16
prs. ind.	0	0	2	2	3

ii) *nelle* (3)

	W	T	AV	RV	RSV
<i>nyle</i>	1	0	0	0	0
<i>will not</i>	2	3	3	2	2
<i>would not</i>	0	0	0	1	0
<i>unwilling</i>	0	0	0	0	1

2. Preterite (16)

i) *wolde* (9)

	W	T	AV	RV	RSV
<i>would</i>	4	4	4	4	2
<i>should</i>	3	0	0	0	0
volitionを 表わす動詞など	1	2	2	2	4
<i>might</i>	0	2	2	2	0
その他	1	1	1	1	3

ii) *molde* (7)

	W	T	AV	RV	RSV
<i>would not</i>	6	5	6	6	4
volitionを 表わす動詞など	0	1	1	1	3

これによって AV までは AS と大差ないが、RV と RSV、とくに RSV で volition を表わすのに *will* よりは *would* あるいはその他の動詞などが多く用いられていることがわかる。3. 8 でのべたように、W では *will* はラテン語の *volo* を訳すのに用いられ、futurity の表現には *shall* が使われており、Tyndale でも大体同様であった。それに対して ModE では futurity を表わすのに *will* が用いられることが多くなり、RSV では著しい。そこで RSV で AS *wylle* に対応して *wille* が用いられている所をみると、1 *will* が 2 (8: 3, 26: 39¹)、2 人称の疑問文が 2 (26: 15¹, 26: 17)、2 人称の Clause が 2 (*if* 8: 2¹; *as* 26: 39²) である。RSV で volition を表わすのに用いられている語には *resolve*, *wish*, *desire*, *choose*, *please*, *want*, *willing*; *refuse*, *unwilling* があり、T—RV には *be minded*, *desire*, *require*, *list*, *willing*; *loth* などがある。

3. 9. 2. つぎに否定命令の表現に AS で *nelle*, *nellan* が 11 回用いられているが、これに対して W ではこれに対応するものの他に AS の Imperative にも対応して 26 回 *nyl(e)* が使われている。T 以降ではほとんどすべて Imperative である (T に *shall* が 3, RSV に *are not to* が 1)。W の *nyl(e)* はラテン語の *nolo* に対応する。一例をあげれば、

- 1: 20 AS *nelle ðú ondrædan Marian, ðine gemæccean, to onfónne*
 W *nyl thou drede to take Marie, thi wyf*
 T *feare not to take vnto the Mary, thy wyfe*
 AV *feare not to take vnto thee Mary thy wife*
 RV *fear not to take unto the Mary thy wife*
 RSV *do not fear to take Mary your wife*

以上のことから *will* についてそのおもな点を概観すれば、

	AS	W	T, AV	RV	RSV
volition	<i>wllan</i>	<i>wll</i>	<i>wll</i>	<i>wll</i> <i>would</i> その他	その他 <i>would</i> <i>wll</i>
Neg. imp.	imp. <i>nellan</i>	<i>nyl(e)</i> imp.	imp.	imp.	imp.
futurity	prs. ind.	<i>shall</i>	<i>shall</i> <i>wll</i>	<i>shall</i> <i>wll</i>	<i>wll</i> <i>shall</i>

3. 10. 以上でいわゆる法助動詞 *can, may, must, ought, shall, will* のマタイ伝の六つの訳における状態を概観したのであるが、その目的は、すでにのべたように、個々の語の変遷をみるのではなくて、各時期におけるこれらの語、およびそれと関連した語の関係を念頭において、その移り変りをみることであった。また、これだけの資料から詳細な用法にまで立ち入って考察することは不可能なので、大略をのべるにとどめた。こういった記述から、各語について表示を試みたように、各語の歴史的考察を行なう場合に、どのような表現を考慮に入れるべきかが、少なくともここで取り扱った資料の範囲内では、明らかにすることができた。比較的規則的な変遷を幾つかあげれば

cunnan—*know* (3. 4. 1)

magan—*can* (3. 4. 2)

āgan—*have* (3. 7. 1)

sculan—*owe* (3. 7. 2)

のような交代がみられ、また

Present (futurity)—*shall, will* (3. 8. 1)

Imperative—*shall*, Imperative (3. 8. 2)

Imperative (Neg.) *nyl(e)*—Imperative (3. 9. 2)

Subjunctive (Final clause)—Subjunctive—*may* (3. 5)

Subjunctive—Subjunctive, *shall, should*, etc. (3. 8. 3)

などのように、動詞のある形に対応して助動詞が用いられることの多

い場合もある。しかし、各語は各時期における言語体系のなかに位置を占めているのであって、ある語が前の時期の他の語に対応していても、それを単に前の表現にかわるものと考えすることは正当でなく、その時期におけるその語の性質上、それが前の時期において他の表現が占めていた位置に現われることが多いということにすぎない。したがって、各時期における各語の全体の用法を観察することが必要である。まず歴史的考慮を排除した記述を行ない、個々の要素が、各時期において、すたれつつあったか、一般的であったか、新興のものであったかを明らかにし、その上で各時期の比較を行なうべきである。しかし、記述的研究が歴史的研究の前提となると同時に、歴史的研究をめざす場合には、各時期のいかなる表現を取り上げるべきかを決定するためには、前後の時期についての歴史的考慮が必要である。本章は、こういった方向への一つの手がかりを与えるであろう。

本稿において、私はこれまで、いわば断片的に行なってきた、個々の法助動詞の歴史的研究に対する反省として、法助動詞とは何かについて、これまでの諸学者の意見をたどりながら考え、つぎにその歴史的な取り扱い方について、具体的な事実に基づいて考察を試みた。しかし抽象的な議論に走るのをさけるために、限られた資料の範囲内の事実の記述にとどめたので、扱うべくして扱いきれなかった問題は多い。私は一般的な、あるいは詳細にわたる議論を行なうことよりも、一度はなまの事実をまとめておくことが必要だと思っていたが、ここにその機会が与えられたので、いわば資料の整理といった形で提出することにした。こういった意味で、本稿は法助動詞の歴史的研究そのものではなく、それに対する一つの序説ともいえるべきものである。

参 考 文 献

(研究書)

- Brunner, K., *Die englische Sprache*. 2 Bde. Halle. 1950—1.
 Campbell, A., *Old English Grammar*. Oxford. 1959.

- Charleston, B. M., *Studies on the Syntax of the English Verb*. (Schweizer · Anglistische Arbeiten, 11) Bern. 1941.
- Curme, G. O., *Syntax*. Boston. 1931.
- Davis, N., *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. Oxford. 1953.
- Deutschbein, M., *System der neuenglischen Syntax*. Leipzig. 1916.
- Franz, W., *Die Sprache Shakespeares*. Halle. 1939.
- Fridén, G., *Studies on the Tenses of the English Verb from Chaucer to Shakespeare*. (Essays and Studies on English Language and Literature) Upsala. 1948.
- Fries, C. C., *The Structure of English*. New York. 1952.
- Gleason, H. A., *An Introduction to Descriptive Linguistics*. New York. 1955.
- Hill, A. A., *Introduction to Linguistic Structures*. New York. 1958.
- Hoeningwald, H. M., *Language Change and Linguistic Reconstruction*. Chicago. 1960.
- Jespersen, O., *Analytic Syntax*. London. 1937.
- Jespersen, O., *A Modern English Grammar*. 7 pts. London & Copenhagen. 1909—49.
- Jespersen, O., *The Philosophy of Grammar*. London. 1924.
- Jespersen, O., *The System of Grammar*. London. 1933.
- Kruisinga, E., *A Handbook of Present-day English*. 4 vols. I. Utrecht. 1925⁴. II. 1—3. Groningen. 1931—2⁵.
- Lindberg, C. (ed.), *MS. Bodley. 959. Genesis-Baruch 3.20 in the Earlier Version of the Wycliffite Bible. Vol. 1: Genesis & Exodus*. (Stockholm Studies in English, VI) Stockholm. 1959.
- Mätzner, E., *Englische Grammatik*. 3 Bde. Berlin. 1880—5³.
- 中島文雄「文法の原理」東京. 1949.
- Onions, C. T., *An Advanced English Syntax*. London. 1927⁴
- Poutsma, H., *A Grammar of Late Modern English*. 5 vols. Groningen. I. 1928—9². II. 1914—26.
- Reid, T. B. W., *Historical Philology and Linguistic Science*. Oxford. 1960.
- Sievers, E. & Brunner, K., *Altenglische Grammatik*. Halle. 1951².
- Sonnenschein, E. A., *A New English Grammar*. 3 pts. Oxford. 1916.
- Sonnenschein, E. A., *The Soul of Grammar*. Cambridge. 1929².
- Standop, E., *Syntax und Semantik der modalen Hilfsverben im Altenglischen*. (Beiträge zur Englischen Philologie, 38) Bochum-Langendreer. 1957.

- Sweet, H., *A New English Grammar*. 2 pts. Oxford. 1891—8.
 Visser, F. T., *A Syntax of the English Language of St. Thomas More*.
 (Materials for the Study of the Old English Drama, 19, 24, 26) Louvain. 1946—56.
 Zandvoort, R. W., *A Handbook of English Grammar*. London. 1957.

(テキスト)

- AS, W, T: Bosworth, J. & Waring, G. (ed.), *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale*. London. 1888.
 AV: Wright, W. A., *The Authorised Version of the English Bible 1611*. 5 vols. Cambridge. 1909. (Vol. 5. The New Testament).
 RV: *The New Testament. Revised Version* (1881) (World's Classics, 346) Oxford. 1929.
 RSV: *The Holy Bible. Revised Standard Version* (OT 1952, NT 1946) London. 1957.
 L: *Biblia Sacra Vulgatae Editionis*. Paris. (no date)
 G: *Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des alten u. neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers*. Stuttgart. 1952.

附 表

1. マタイ伝の 6 種の訳 (AS, W, T, AV, RV, RSV) における *can, may, must, ought, shall, will* の例を, 本文で取り扱った順に配列した。1. AS *cunnan* (3. 4. 1) のように, 見出しの括弧内に本文の節を示した。
2. 原則として AV の例を文脈がわかる程度に引用し, 他は略記した。ただし 11 では AS Subjunctive を基準として, AS によって Clause を分類したため, AS の例もかなり詳しくあげた。
3. *shall, will* は頻度が非常に高く, しかも futurity に関するものが多いため, その場合は省略した。
4. 略語: imp.=imperative, inf.=infinitive, prog.=progressive, prs.=present, pt.=preterite, subj.=subjunctive. (3) のような括弧

内の数字は AV と人称が異なる場合の人称を示す。一は助動詞が繰返えされず不定詞のみの場合、およびその箇所が欠除している場合を示す。

5. AS は *Vetus Italica* からの訳であり、MS. No. CXL, Corpus Christi College, Cambridge (990 年から 1030 年の間, c 995) と MS li. 2. I1, University Library, Cambridge に基づき、種々の MS. と照合されている。W は *Vulgate* からの訳であり、J. Forshall & Sir F. Madden 編 (Oxford, 1850) の版の First Version (1390 年以前, c 1389) に基づいている。T はギリシャ語からの訳で、1526 年の初版による。(以上 Bosworth & Waring, *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels* の Preface による。なお本書は東京大学の宮部菊男助教授の御蔵書を借用させていただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。)

〔追記〕 本稿執筆後、New Testament の新訳 *The New English Bible* (Oxford & Cambridge, 1961) が出版された。新訳は AV の改訳ではなく、現代英語の idiom を一貫して用いることを旨とした文字通りの新訳で、予言的未来の *shall* など biblical な表現はもちろんみられるが、命令の *shall* は用いられず、Do not commit murder (AV, RV: Thou shalt not kill; RSV: You shall not kill) のように訳されていて、RSV より現代的なようである。新訳を入手したときには、原稿はすでに印刷所に送られていたので、これを利用することはできなかった。

1. AS *cunnan* (3. 4. 1)

	AS c 995	W c 1389	T 1526	AV 1611	RV 1881	RSV 1946
7:11 ¹	cunnun syl- lan	han knowen for to	cann geve	If ye...know how to giue good giftes vnto your children	Know how to	know how to
11:27 ¹	can	knewe	knoweth	no man knoweth the sonne but the father	knoweth	knows
27 ²	can	knewe	knoweth	neither knoweth any man the father, saue the sonne	doth know	knows
16: 3 ²	Nú cunne ge tocnāwan	han knowe to	can	yee can discerne	know how to	know how to
22:29	ne cunnan	nether knowynge	knowe not	not knowing the Scriptures	not knowing	know neith- er
25:12	ne can	knowe nat	knowe not	I know you not	know not	do not know
26:72	ne cúðe(3)	knewe nat (3)	knowe not	I doe not know the man	know not	do not know
74	ne cúðe(3)	knewe nat	knewe not	I know not the man	know not	do not know

2. AS *magan* (3. 4. 2)

5:13 ³	Hit ne mæg syððan to náhte	To no thing it is worth	It is goode for nothyn- ge	It is thenceforth good for nothing	it is good for nothing	It is no good for anything
16:18 ²	helle gatu ne magón ongén ða	shulen nat han mi3t a3eins it	shall nott prevayle a genst it	the gates of hell shall not preuaile aganst it	shall not prevail aganst it	shall not prevail aganst it
5:14	ne mæg	may nat	cannot	A citie that is set on an	cannot	cannot

	AS	W	T	AV	RV	RSV
				hill, cannot be hid.		
5:36 ²	ne miht	maist not	canst not	thou canst not make one haire white or blacke	canst not	cannot
6:24 ¹	Ne mæg	may	can	No man can serue two ma- sters	can	can
24 ⁴	Ne mágon	mowen nat	can nott	Ye cannot serue God and Mammon.	cannot	cannot
27	mæg	may	coulde	Which of you by taking thought can adde one cubite vnto his stature?	can	can
7:18 ¹	Ne mæg	may nat	cannott	A good tree cannot bring forth euil fruit	cannot	cannot
18 ²	—	—	can	neither can a corrupt tree bring forth good fruit	can	can
8: 2 ²	miht	maist	canst	thou canst make me cleane	canst	can
9:28	mæg	may	am able to	Belcuc ye that I am able to doe this?	am able to	am able to
10:28 ²	ne mágon	mowen nat	be nott able to	feare not them which ..are not able to kill	are not able to	cannot
28 ³	mæg	may	is able to	feare him which is able to destroy	is able to	can
12:26	mæg	shal	shall	how shall then his kingdome stand?	shall	will
29 ¹	mæg	may	can	how can one enter into a strong mans house	can	can
34	mágon	mowe	can	how can ye, being euil, speake goode things?	can	can

	AS	W	T	AV	RV	RSV
16: 3 ³	ne mágon	mowen not	can not	can ye not diserne...?	cannot	cannot
19:12	mæge	may	can	He that is able to receiue <i>it</i>	is able to	is able to
25	mæg	may	can	Who then can be saued?	can	can
20:22 ¹	Máge	Mowen	Are ye able to	Are ye able to drinke of the cup...?	Are yc able to	Are ye able to
22 ⁴	mágon	mowen	—	We are able.	We are able.	We are able.
24:24 ³	mæg	may	yff it were possible	if it were possible	if possible	if possible
26.42	ne mæge	may nat	can not	if this cup may not passe away	cannot	cannot
54 ¹	mágon	shulen	shall	But how then shall the Scriptures be fulfilled?	should	should
61	mæg	may	can	I am able to destroy the Temple of God	am able to	am able to
27:42 ¹	ne mæg	may nat	can not	himselpe he cannot saue	cannot	cannot
8:28	ne mihte	mīȝte	myght	so that no man might passe by that way	could	could
17:16	mihton	myȝten	coulde	they could not cure him	could	could
19	myhte	mīȝte	could	Why could not we cast him out?	could	could
22:46 ¹	mihton	mīȝt	coulde	no man was able to answeare him	was able to	was able to
26: 9	mihte beon	mīȝte be	myght haue bene	For this ointment might haue bin sold for much	mightl haue been	might have been
40	mihte	mīȝte	coulde	could ye not watch with me	could	could

	AS	W	T	AV	RV	RSV
26:53 ¹	ne myhte	may nat	can not	one houre? Thinkest thou that I cannot now pray to my father...?	cannot	cannot

3. Final clause (3. 5)

1:22	pt. subj.	shulde	to-inf.	that it might be fulfilled	might	to-inf.
2: 8	prs. subj.	—	maye	that I may come and wors- hip him	may	may
15	pt. subj.	shulde	to-inf.	that it might be fulfilled	might	to-inf.
23 ¹	pt. subj.	shulde	to-inf.	that it might be fulfilled	might	might
4: 1	pt. subj.	shulde	to-inf.	to bee tempted of the deuill	to-inf.	to-inf.
14	pt. subj.	shulde	To-inf.	That it might be fulfilled	might	might
5:16	prs. subj.	prs. subj.	maye	that they may see your good workes	may	may
45	prs. subj.	prs. subj.	maye	That yee may be the child- ren of your father which is in heauen	may	may
6: 1 ¹	prs. subj.	prs. subj.	wolde	to be seene of them	to-inf.	in order to- inf.
4 ¹	prs. subj.	prs. subj.	may	That thine almes be in secret	may	may
5 ³	prs. subj.	prs. subj.	wolde	that they may be seene of men	may	may
16 ²	prs. subj.	prs. subj.	myght	that they may appeare vnto men to fast	may	may
18 ¹	prs. subj.	prs. subj.	prs. subj.	That thou appeare not vnto	prs subj	may

	AS	W	T	AV	RV	RSV
8:17	pt. subj.	shulde	To-inf.	men to fast That it might be fulfilled	might	to-inf.
9: 6	prs. subj.	prs. subj.	may	that yee may know	may	may
12:10	pt. subj.	shulden	myght	that they might accuse him	might	might
17	pt. subj.	shulde	To-inf.	That it might be fulfilled	might	to-inf.
13:35 ¹	pt. subj.	shulde	To-inf.	That it might be fulfilled	might	to-inf.
14:15	prs. subj.	—	maye	that they may goe	may	to-inf.
36	pt. subj.	shulden	myght	that they might onely touch	might	might
18:16 ²	prs. subj.	prs. subj.	maye	that...euery word may be established	may	may
19:13	pt. subj.	shulde	shulde	that he should put his hands on them	should	might
16 ²	prs. subj.	prs. subj.	maye	that I may haue eternall life	may	to-inf.
21: 4	pt. subj.	shuld	to-inf.	that it might be fulfilled	might	to-inf.
34	pt. subj.	pt. subj.	to-inf.	that they might receiue the fruits of it	to-inf.	to-inf.
23:26	prs. subj.	prs. subj.	maye	that the outside of them may bee cleane	may	may
35	prs. subj.	prs. subj.	may	That vpon you may come all the righteous blood	may	may
24: 1	pt. subj.	shulden	for to-inf.	for to shew him the build- ings	to-inf.	to-inf.
26:56	prs. subj.	shulden	myght	that the Scriptures of the Prophets might be fulfilled	might	might
58	pt. subj.	shulde	to-inf.	...and sate with the seruants	to-inf.	to-inf.

	AS	W	T	AV	RV	RSV
26:59	pt. subj.	shulden	for to-inf.	to see the end ...sought false witness against Jesus to put him to death	might	might
27:26	to-inf.	shulde	to-inf.	he delivered him to be crucified	to-inf.	to-inf.
35	pt. subj.	shulde	to-inf.	that it might be fulfilled	—	—

4. AS *mōtan* (3. 6. 1)

8:25	<i>móton</i>	prs.	prs.	we perish	prs.	prs progr.
18:21 ²	<i>mót ic him forgyfan?</i>	shal	shall	Lord, how oft shall my brother sinne against mee, and I forgieue him?	prs.	prs.
20:15 ¹	<i>ne mótt ic dón...?</i>	Wher it is nat leful to me for to do ..?	Ys it not lawfull ffor me to do...?	Is it not lawfull for mee to do...?	Is it not lawful for me to do...?	Am I not allowed to do...?

5. *must* (3. 6. 2)

5:48	imp.	imp.	shal	Be yee therefore perfect	shall	must
6: 5 ²	imp.	shuln nat	shalt nott	thou shalt not be as the hypocrites are	shall not	must not
16:21 ¹	wolde	it byhou- ith hym to	must	...began Iesus to shew...how that he must goe vnto Hieru- salem,	must	must
21 ²	—	—	must	and suffer many things	—	—

	AS	W	T	AV	RV	RSV
17:10	ðæt gebyrige ærest cuman Helian	that it behoueth Hely first come	that Helias muste fysrt come	Why then say the Scribes that Elias must first come?	must	must
18: 7	neod ys, ðæt...	it is neede, that ..	hit is necessary, that...	it must needs be that offences come	it must needs be that...	it is necessary that.
19:16 ¹	prs	shall	shall	what good things shall I do...?	shall	must
20:27 ²	prs. subj.	shall	let	let him be your scruant	shall	must
22:24	prs. subj.	prs. subj.	may	his brother shall marrie his wife	shall	must
24: 6 ²	scolon	it bihoueth thes thingis to be don	muste	all <i>these things</i> must come to passe	must needs	must
24:44 ¹	imp.	imp.	imp.	be yee also ready	imp.	must
26:35 ¹	scyle	it shal behoue me to dye	sholde	Though I should die with thee	must	must
26:54 ²	hyt gebyran to beonne	it behoueth to be don	muste	thus it must be	must	must

6. AS *āgan* (3. 7. 1)

5· 5	hí eorþan āgun	shuln welde	shall inherit	they shall inherit the carth	shall inherit	shall inherit
------	----------------	-------------	---------------	------------------------------	---------------	---------------

	AS	W	T	AV	RV	RSV
24:47 ²	eall ðæt he áh	alle his goodis	all his goodes	all his goods	all that he hath	all his possessions
18:25 ²	eall ðæt he áhte	hadde	had	all that he had	had	had

7. *owe* (3. 7. 2)

18-24	sceolde	ow3te	ought	one was brought vnto him which ought him ten thou- sand talents	owed	owed
28 ¹	sceolde	ou3te	ought	one of his fellow-seruants, which ought him an hundred pence	owed	owed
28 ²	scealt	owist	owest	Pay mee that thou owest	owest	owe
23:16 ³	ys scyldig	owith	is detter	whosoouer shall swear by the gold of the Temple. he is a debter	is a debtor	is bound by
18 ³	ys gyltig	owith	ys detter	whosoouer sweareth by the gift that is vpon it, he is gultie	is a debtor	is bound by

8. *ought* (3. 7. 3)

3:14	sceal	owe for to	ought to	I haue need to bee baptized of him	have need to	need to
23:23	hyt gebyr- ede ðæt...	it behofte for to do	ought ye to have done	these ought ye to haue done	ought to haue done	ought to have done

	AS	W	T	AV	RV	RSV
25:27 ¹	Hyt gebyr- ede ðæt ..	it bihou- yde thee to sende	Thou ought- est to have had	Thou oughtest...to haue put my money to exchangers	oughtest to have put	ought to have put

9. AS *sceulan* (3. 8. 1)

3:14	sceal (see 8)					
9:15 ¹	sceolun (2)	mow	Can	Can the children of the bride-chamber mourne...?	Can	Can
11: 3 ²	sceolon	prs.	shall	doc we looke for another?	prs.	shall
18:28 ²	scealt(see 7)					
24: 6 ²	scolon (see 5)					
26:35 ¹	scyle (see 5)					
18:24	sceolde (see 7)					
28 ¹	sceolde (see 7)					
20:10	sceoldon	weren to take	shulde receave	they supposed that they should haue receiued more	would receive	would receive

10. AS Imperative (3. 8. 2)

5:21 ¹	imp.	shalt	shalt	Thou shalt not kill	shalt	shall
24	imp.	shalt	imp.	come and offer thy gift	imp.	imp.
27	imp.	shalt nat	shalt nott	Thou shat not commit adul-	shalt not	shall not

	AS	W	T	AV	RV	RSV
5:33 ¹	imp.	shalt not	shalt not	terie Thou shalt not forswear thy selfe	shalt not	shall not
36 ¹	imp.	shalt	shalt	Neither shalt thou sweare by thy head	shalt	imp.
43	imp.	shalt	shalt	Thou shalt loue thy neighbour	shalt	shall
48	imp. (see 5)					
6: 5 ²	imp. (see 5)					
9	imp.	shulen	imp.	pray yee	imp.	imp.
7: 5	imp.	shalt	shalte	and then shalt thou see clearly	shalt	will
16:11	imp.	imp.	imp.	ye should beware of the leauen of the Pharises	imp.	imp.
19:18 ¹	imp.	shalt	shalt	Thou shalt do no murder	shalt	shall
18 ²	imp.	shalt	shalt	Thou shalt not commit adultery	shalt	shall
18 ³	imp.	shalt	shalt	Thou shalt not steale	shalt	shall
18 ⁴	imp.	shalt	shalt	Thou shalt not beare false witness	shalt	shall
19	imp.	shalt	shalt	Thou shalt loue thy neighbour	shalt	shall
21: 3 ²	imp.	imp.	imp.	yee shall say	shall	shall
22:37	imp.	shalt	shalt	Thou shalt loue the Lord	shalt	shall
39	imp.	shalt	shalt	Thou shalt loue thy	shalt	shall

	AS	W	T	AV	RV	RSV
24:44 ¹	imp. (see 5)			neighbour		

11. AS Subjunctive (3. 8. 3)

(1) Principal sentence

	AS	W	T	AV	RV	RSV
5:37	sí eower spræc...	be 3oure word...	shalbe	let you communica- tion bee...	let	let
7:19 ¹	sý hyt forcorfen	shal be kitte doun	shalbe hewne doune	...is hewen downe	is hewn down	is cut down
15: 4	swelte se deape	dye he by deeth	shall suffer deeth	let him die the death	let	let
16:22	ne gewurðe ðæt	shal not	shall not	This shal not be vnto shall thee.	shall	shall
21:38	uton...habban us hys æhta	we shulen haue	lett vs take	let vs sease on his inheritance	let us	let us
23:30	Gyf we wæron..., næron we...(seee (2) viii)	shulden	wolde	wee would not haue bene	should	would
24:22 ²	búton..., nære nán mann hál geworden (see (2) viii)	schuldc not	shulde	there should no flesh be sauced	would have been	would
25:27 ²	Hyt gebyrede ðæt ðú befæstest mín	shulde haue re-	shulde I have re-	Thou oughtest...to haue put my money	should have received	should have received

AS	W	T	AV	RV	RSV
feoh my neterum, and ic náme...ðæt mín ys...	sccyued	ceaved	to the exchangers, and then ...I should haue receiued mine owne		

(2) Dependent clause

(1) Indirect narration

2: 4	áxode, hwær Crist ácenned wære	shulde	shulde	demanded...where Christ should be borne	should	was to
6:25 ¹	ge ne sín ymbhýdi- ge eowre sawle, hwæt ge eton...	shulen	shall	Take no thought for your life, what yec shall eate..	shall	shall
25 ⁸	mid hwam ge sýn ymbscrýdde	shuln	shall	what yec shall put on	shall	shall
10:19 ⁸	ne þence ge, hú oð- ðe hwæt ge sprecon	speeken	shall	take no thought, how or what ye shall speake	shall	are to
19 ⁸	hwæt ge sprecon	shuln	shall	what ye shall speake	shall	are to
24: 3 ¹	Sæge us, hwænne ðás þing gewurðon,	schuln	shalbe	Tell vs, when shall these things be?	shall	will
3 ²	and hwylc tácn sí ðines tocymcs	—	shalbe	and what <i>shall be</i> the signe of thy comming...?	shall	will
6: 7 ²	hig wénap ðæt hí sín gehýrede...	ben (prs. subj.)	shalbe	they thinke that they shall be heard	shall	will

	AS	W	T	AV	RV	RSV
26:53 ²	Wénst ðú,...ðæt he sende me...	shal	shall	... Thinkest thou that .. he shall... giue me...?	shall	will
(ii) <i>dæt</i> -clause ¹						
5:29 ¹	ðc ys betere, ðæt án ðínra lima for-wurðe	perishc (prs. subj.)	perisshe (prs. subj.)	it is profitable for thee that one of thy membres should perish	should	perish (prs. subj.)
31 ¹	(the same as above)					
18: 6 ³	betere him ys ðæt án cwyrn-stán sí to his swyran gecnytt,	be (prs. subj.)	werc (pt. subj.)	it were better for him that a milstone were hanged about his necke,	shoud	to-inf.
6 ⁴	and sí besenced on sæs grúnd.	be (prs. subj.)	werc (pt. subj.)	and that hec were drowned in the depth of the Sea.	should	to-inf.
8: 8 ¹	ne eom ic wyrðe, ðæt ðú ingange under mine þecene	entre (prs. subj.)	shuldest	I am not worthy that thou shouldst come vnder my roofe	shouldest	to have you come
(iii) <i>dæt</i> -clause ²						
15:35	he bebað ðá ðæt seo menegu sæte ofer ðære corþan	shuldc	to-inf.	hec commaunded the multitude to sit downc	to-inf.	to-inf.
16:20	Ðá bebead se Hæle-nd hys leorningcni-	shulden	shulde	Then charged hee... that they	should	to-inf.

	AS	W	T	AV	RV	RSV
	htum, ðæt hig nánnum menn ne sædon...			should not tel no man...		
8:34	ðá bædon hig hyne, ðæt he férdæ fram heora gemærum	shulde	to-inf.	they besought him that hee would de- part out of their coasts	would	to-inf.
16: 1	...bædon ðæt he him sum tæcen of heofone ætýwde	for to-inf.	wold	desired him that hee would shew them a signe from heauen	to-inf.	to-inf.
9:38	Biddað ðæs ripes hlaforð, ðæt he sende wyrhtan to hys ripe.	sende (prs. subj.)	to-inf.	Pray ye...the Lord of the haruest, that he will send foorth labourers into his harucst.	send (prs. subj.)	to-inf.
18:14	nys willa befóran eowrum fæder...ðæt án forwurde of ðis- um lytlingum	perishe (prs. subj.)	shulde	it is not the will of your father ..that one of these little ones should perish	should	should
27:32	ðone hig nýddon, ðæt he bære hys róde	he shulde take	to-inf.	him they compelled to beare his Crosse	that they might bear	to-inf.
(iv) Relative clause						
10:26 ¹	nys...nán þing dýhle, ðæt ne wurde gesw- útelod,	shal nat	shall not	there is nothing cou- ered, that shall not be reueiled;	shall not	will not
26 ²	ne nán dýhle þing,	shal nat	shall not	and hidde, that shall	shall not	will not

	AS	W	T	AV	RV	RSV
	ðæt ne wurðe geopenod.			not be knowen.		
12:11 ²	Hwylc man ys of eow ðe hæbbe án sceap...?	that hath	iff he had	What man shal there be among you, that shal haue one sheepe	shall should	if he has might
14: 7 ²	swá hwæt swá heo hyne bræde	what eucr thinge she hadde axide	whatso- euer she wolde axe	whatsoeuer she would aske		
15:32 ¹	hig nabbað hwæt hig eton	shulen	nothings to eate	haue nothing to eate	nothing to eat	nothing to eat
21:41 ⁸	mid óðrum tilion, ðe him hys wæstm hyro tidum ágyfon	shulen	shall	other husbandmen, which shall render him the fruits	shall	will
22: 9	swá hwylce swá ge geméton	shulen	fynde	as many as yee shall finde	shall	find
24: 2 ²	stán uppan stáne ðe ne beo toworpen	shal nat	shall not	one stone vpon another, that shall not be thrown downe	shall	will

(v) Temporal clause

6: 5 ¹	ðonne ge cow gcbid-ðon	when 3e shuln preye	when thou praycst	when thou prayest	prayest	pray
16:28 ²	ær hig geseon	til thei seen	tyll they shall have sene	till they see	see	see
23:39 ²	ærðam ðe ge secgeon	til that see seien	tyll that ye saye	till ye shall say	shall	say

	AS	W	T	AV	RV	RSV
18:30 ²	oð ðæt he him eall ágefe	til that he paide	tyll he shulde paye	till hee should pay the debt	should	should
34	oð ðæt he eall águlde	til that he paide	tyll he shulde paye	till hee should pay	should	should

(vi) Final clause (see 3)

17:27 ¹	ðæt we hí ne ge-unrótsigeon	that we sclandre nat hem	lest we shulde of-fende them	least we should of-fend them	offend	not to-inf.
13:15 ¹	ðe-læs hig áfre mid eagam geseon.	that sum tyme thei see with eezen,	lest they shulde se with their eyes	lest...they should see with their eyes,	should	should
15 ²	and mid carum gehýron.	and with cris hecr-en	and heare with their cares	and heare with their eares	—	—
15 ³	and mid heortan ongyton.	and vnderstonden in herte,	and shuld vnderstonde with their hertes	and should vnderst-and with their heart.	—	—
15 ⁴	and sin gecyrrede	and thei ben to gidre turned	and shulde turne	and should be con-verted	should	—
15 ⁵	and ic hig gehæle	and I heele hem	that Y myght heale them	and i should heale them	should	for me to heal

(vii) Consecutive clause

	AS	W	T	AV	RV	RSV
15:33 ²	Hwar nime we swá fela hláfa on ðis wéstene, ðæt we gefyllan swá mycele mænegu ?	so many lo-ouys . that we fulfille... (prs subj.)	so moche brecd...as shulde suffyse...	Whence should we haue so much bread ...as to fill so great a multitude ?	to-inf.	to-inf.

(viii) Conditional clause

5:39	gyf hwá ðe slea on ðin swýðre wenge	zif any shal smyte thee	yf a man geve thee a blowe	whosoouer shall smite thee on thy right cheeke	smiteth	if any one strikes you
21: 3 ¹	gyf hwá eow ánig þing to cwyp	zif eny man shal seie	if eny man saye	if any man say ought vnto you	say (prs. subj.)	says
5:20 ¹	búton eower rihtwisnys máre sý ðonne ðæra writera	but zif zoure rihtwisnesse shal be more plenteuouse	except youre rihtwesnes excede	except your righte-ousnesse shall exceede the righte-ousnesse of the Scribes	shall	unless... exceeds
12:29 ²	búton he gebinde árest ðone strangan,	but first he shall bynde	excepte he fyrst bynde	except hee first binde the strong man,	bind (prs subj.)	unless he binds
29 ³	and ðonne hys hús bereafige	and then he shal rauy ^s he	and then spoyle	and then he will spoile his house	will	may
18: 3 ¹	búton ge beon gecyr-rede	but zif ze shulen be turnyd	except ye tourne	Except yee be con-verted	Except ye turn	unless you turn
24:22 ¹	búton ða dagas gecscyrte wæron	but tho dayes had-den be breg-	except tho-se dayes shulde be	except those dayes should be shortned	had been	if those days had not been

	AS	W	T	AV	RV	RSV
		gid	shortencd			shortened

(ix) Concessive clause

16:26 ²	ðeah he ealne midd- aneard gestrýne	ʒif he wynne	yf he shul- de wyn	if hee shal gaine the whole world	shall	gains
26:33 ¹	ðeah ðe hig ealle ge-untreowsion on ðe	ʒif alle shul- en be sclau- ndrid in thee	Though all men shulde be hurte by the	Though all men shall be offended	shall	Though they all fall away

(x) Comparative clause

5:29 ²	ðonne eal ðín lic- hama sí on helle ásend	than that al thi body go in to helle	then that thy whole body shuld be caste in to helle	it is profitable for thee that...and not that thy whole body should be cast into hell	(should)	be thrown (prs. subj.)
30 ²	ðonne eal ðín lic- hama fare to helle	(W, T, AV, RV, RSV the same as above)				

12. AS *willan* (3. 9. 1)

	AS	W	T	AV	RV	RSV
5:40	wylle	wole	will	if any man will sue thee at the law	would	would
42	wylle	wol	wolde	from him that would borrow of thee, turne not thou away	would	would
7:12 ¹	wyllen	wolen	wolde	whatsoever ye would that	would	wish

	AS	W	T	AV	RV	RSV
8: 2 ¹	wylt	wolt	wylt	men should doe to you		
3	wylle	wole	wylle	If thou wylt	wilt	will
9:13	wylle mild- heortnesse	wole mer- eye	have plea- sure in mercy	I will	will	will
				I will haue mercy	desire mercy	desire mercy
11:14 ¹	wyllap	wolen	wyll	if ye wil receiue <i>it</i>	are willing to	are willing to
27 ³	wyle	wolde	will	whomsoeuer the sonne will reueile him	willeth to	chooses to
12: 7 ¹	wylle mild- heortnesse	wole mercy	requyre mercy	I will haue mercy	desire mercy	desire mercy
38	wyllap	wolden	wolde fay- ne	we would see a signe from thee	would	wish to
13:28	Wylt	Wolt	Wylt	Wilt thou then that we go and gather them vp?	Wilt	do you want to...?
15:28	wylle	wolt	desyrest	euen as thou wilt	wilt	desire
16:24	wylle	wole	wyll	If any man will come after me	would	would
25 ¹	wyle	wole	wyll	whosoeuer will saue his life	would	would
25 ³	wyle	shal	shall	whosoeuer will lose his life for my sake	shall	prs.
17: 4 ¹	wylt	wolt	wylt	If thou wilt	wilt	wish
19:17	wylt	wolt	wilt	if thou wilt enter into life	wouldest	would
21 ¹	wylt	wolt	wylt	If thou wilt be perfect	wouldest	would

	AS	W	T	AV	RV	RSV
20:14	wylle	wole	will	I will giue vnto this last	will	choose to
15 ²	wylle	wole	me listeth	to doe what I wil with mine owne	will	choose to
21 ¹	wylt	wolt	wylt	What wilt thou?	wouldest	What do you want?
26 ²	wyle	wole	wyll	whosoener will be great	would	would
27 ¹	wyle	wole	wilbe	whosoener will be chiefe	would	would
32 ¹	wylle	wole	will	What will yee that I shall doe vnto yu?	will	What do you want me to do?
24:42	wyle	is to	wyll	ye know not what houre your Lord doth come	prs.	prs. prog.
44 ²	wyle	is to	shall	in such an houre as you thinke not, the sonne of man commeth	prs.	prs. prog.
26:15 ¹	wylle	wolen	wyll	What will ye giue me...?	are you will- ing to	will
17	wylt	wolt	wylt	Where wilt thou that...?	wilt	will
39 ¹	wylle	wole	wyll	not as I will,	will	will
39 ²	wylt	wolt	wylt	but as thou wilt	wilt	wilt
27:17	wylle	wole	wyll	Whom will ye that I release vnto you?	will	Whom do you want me to...?
21	wylle	wolen	will	Whether of the twaine will ye that I release vnto you?	will	do you want me to
43	wylle	wole	will	if hee will haue him	desireth	desires

	AS	W	T	AV	RV	RSV
15:32 ¹	nelle	wole nat	wyll not	I will not send them away fasting	would not	am unwilling to
21:29	nelle	nyle	wyll not	I will not	will not	will not
23: 4	nellap	wolen nat	wyl not	<i>they themselves</i> will not moue them	will not	will not
1:19 ²	wolde	wolde	was mynded to	Ioseph...was minded to put her away priuily	was minded to	resolved to
14: 5	wolde	willynge to	wold have put	when he would haue put him to death	would have put	wanted to
16:21 ¹	wolde (see 5)					
17:12 ¹	woldon	wolden	lusted	whatsoeuer they listed	listed	pleased
22:15	woldon	shulden	myght	tooke counsell, how they might intangle him in his talke	might	how to-inf.
23:37 ¹	wolde	wold	wolde I have gadered	how often would I haue gathered thy children together...?	would I haue gathered	would I have gathered
24:43 ²	wolde	shulde	wolde	he would haue watched	would have watchod	would have watched
26: 4	woldon	shulden	mygt	consulted that they might take Iesus by subtilitie	might	in order to-inf.
27:15	habban woldon	wolden	wolde chose	a prisoner, whom they would	would	wanted
1:19 ¹	noIde	wolde not	loth to	not willing to make her a publique example	not willing to	unwilling to
2:18	noIde	wolde not	wolde not	Rachel...would not be	would not	refused to

	AS	W	T	AV	RV	RSV
18:30 ¹	nolde	wolde nat	wolde nott	comforted he would not	would not	refused
22: 3	noldon	wolden nat	wolde nott	they would not come	would not	would not
23:37 ²	noldest	woldest nat	wolde not	ye would not	would not	would not
24:43 ³	nolde	—	—	he...would not haue suffered his house to be broken vp	would not have suffer- ed	would not have suffer- ed
27:34	nolde	wolde not	wolde not	hee would not drinke	would not	would not

13. W *nyl(e)* (3. 9. 2)

1:20	nelle ðú	nyl thou	imp.	feare not	fear not	do not fear
3: 9	imp.	nyl 3e	imp.	thinke not to say	imp.	imp.
5:17	Nelle ge	Nyle 3e	Ye shall not	Thinke not	imp.	imp.
6: 2	imp.	nyle thou	shalt not	doe not sound a trumpet	imp.	imp.
7 ¹	nellon ge	nyle 3ee	imp.	vse not vaie repetitions	imp.	imp.
8	Nellen ge	nyl 3e	imp.	Be not yee therefore like vnto them	imp.	imp.
16 ¹	nellon ge	nyl 3e	imp.	be not sad as th Hypocrites	imp.	imp.
19	Nellen ge	Nyl 3e	imp.	Lay not vp for your selues	imp.	imp.
31 ¹	Nellen ge	nyl 3e	imp.	take no thought	imp.	imp.
34 ¹	imp.	nyle 3e	imp.	Take no thought for the	imp.	imp.

	AS	W	T	AV	RV	RSV
7: 1	Nellen ge	Nyle 3e	imp.	morrow		
6	Nellen ge	Nyl 3e	imp.	Ivdge not	imp.	imp.
10: 9	imp.	Nyl 3e	imp.	Giue not that which is holy vnto the dogs	imp.	imp.
19 ²	imp.	nyl 3e	imp.	Prouide neither gold, nor sil- uer	imp.	imp.
28 ¹	imp.	nyl 3e	imp.	take no thought	imp.	imp.
31	imp.	nyle 3e	imp.	feare not them which...are not able to kill	imp.	imp.
34	imp.	Nyl 3ee	imp.	Feare yee not	imp.	imp.
14:27	nellen ge	nyl 3e	imp.	Thinkc not	imp.	imp.
17: 7	imp.	nyl 3e	imp.	be not afraid	imp.	imp.
19:14	nelle ge	nyl 3e	imp.	be not afraid	imp.	imp.
23: 8	imp.	nyl 3ee	shall not	forbid them not to come	imp.	imp.
9	imp.	nyl 3ee	imp.	be not ye called Rabbi	imp.	you are not to be called
24:23 ¹	imp.	nyle 3e	imp.	call no man you father	imp.	imp.
26 ²	imp.	nyle 3e	imp.	beleuee it not	imp.	imp.
26 ³	imp.	nyle 3e	imp.	goe not foorth	imp.	imp.
28: 5	imp.	Nyle 3e	imp.	beleuee it not	imp.	imp.
				Feare not ye	imp.	imp.